トランス

作・鴻上尚史

トランス

0

三人の人物がそれぞれに客席より現れる。
立原雅人（たちはらまさと）と呼ばれる人物
紅谷礼子（べにたにれいこ）と呼ばれる人物
後藤参三（ごとうさんぞう）と呼ばれる人物である。

三人は、これから物語が始まる空間を眺め、舞台へと上がる。
舞台には、「白衣」が置いてある。
三人は同時に、その白衣へと手を伸ばす。
ほんの一瞬の違いで、紅谷礼子が白衣を手にする。
三人は、お互いを見つめ合い、小さく微笑む。
紅谷礼子は白衣を着る。
あとの二人は、舞台の後ろに座り、その姿を見つめ始める。
周りが暗くなり、光が紅谷礼子に集まる。

紅谷　私が最初にお話を始めるのは、たぶん、偶然で、でもそれを人は運命と呼ぶのかもしれません。「事実は存在しない。ただ、解釈だけが存在する」という古い歌がありました。私は、今、何からお話しすればいいのか戸惑っています。あの、順番に、私達の再会から始めてもいいでしょうか。

暗闇から、立原雅人と後藤参三が声をかける。

二人　ええ、どうぞ。

紅谷　そうすることが、私の真実を分かっていただく一番の近道だと思うのです。もちろん、私にとっての真実です。私は何が正常で何が異常かを分類することはできます。ですが、何が妄想で何が真

実かを分ける方法を知らないのです。

後藤　うまく話せないなら、

立原　私の話から始めてもいいのですよ。

紅谷　……あれは、八月だというのにとても肌寒い日、まるで夏が狂ってしまったような午後でした。あの人が訪ねてきたのです。（突然）次の方、どうぞ。

1

そこは診察室の風景となる。

紅谷、椅子に座る。

立原、そわそわと紅谷の診察室に入ってくる。

後藤は、その後ろで、二人のやりとりを見つめている。

紅谷　（思わず立ち上がり）どうしたの！？雅人君でしょう！

立原　久し振り。

紅谷　久し振りじゃないわよ。どうしたのよ、突然！懐かしいわー！何年ぶり？高校時代からだから、えっと、

立原　ずいぶんだ。

紅谷　ずいぶんよ。本当に、ずいぶんよ。よくここが分かったわね。なに、集まるの！？参三はいいって言ったの？

立原　礼子、あのね、

紅谷　ね、いつ集まるの！？今週の土曜は都合が悪いんだ。来週以降にしてくれたらいいんだけど、私の都合で変えられないか？いいよね。よし、変えちゃえ、変えちゃえ！

立原　礼子、あのね、

紅谷　ありゃ、来週の週末もだめだったわ。研修会があるのよ。よし、再来週の週末、これでいいわね。決定！

立原　人の話を聞け！

紅谷　（落ち込みながら、なお自己主張して）……今週の週末はだめなの。

立原　集まる話で来たんじゃない。

紅谷　じゃあ……えっ、まさか、雅人君、私の実家に連絡した？だから、ここが分かったの？私の母親と盛り上がって、娘の「主に恋愛を中心とした私生活」をスパイしろって頼まれたの？（立原のアクションを手で制して）いいこと、スパイなんて絶対にすっぱい（失敗）するわよ。違うの！今のはダジャレじゃないの！中途半端に噛んだだけなの！よけい恥ずかしいわ！これが私の「恋愛以外の私生活」よ！

立原　……お前、よくそれで先生がつとまるな。

紅谷　ちっちっちっ。分かってないな、雅人君。患者はみんな緊張して、診察室のドアを開けるのよ。そんな時に、しかめっつらした医者がいて、本当のことを喋ると思う？一見、バカみたいな医者がいるから、気軽に心の病を語れるんじゃないの。戦略よ、戦略。この紅谷礼子先生の高度な戦略なのよ。

立原　じゃあ、話を聞いてくれるか？

紅谷　えっ……。

立原　僕も、たぶん、患者なんだ。

紅谷　……やだあ。早く言ってよ。

立原　早く言いたかった。

紅谷　最初からやりなおす？

立原　どうやって？

紅谷　（医者くさく）どうしました？

立原、紅谷の変わり方があまりにすごかったので驚く。

立原　……あきれるな。それも、紅谷先生の戦略か。

紅谷　いやいや、お恥ずかしい。はっはっはっ。

立原　なんだ、その笑いは？

紅谷　信頼感をかもしだす低音の包み込むような笑い。はっはっはっ。（低音で）さ、どうしました？

立原　普通に話さないか。

紅谷　……どうしたの？

立原　……いや、じつは、なんと言っていいのか、おかしいんだ。

紅谷　どんなふうに？

立原　自分が自分でないようなんだ。今、まさにこの瞬間、ここで話している自分がとても自分とは思えないんだ。まるで、映画か演劇のワンシーンのようで、相談している自分を演じているとしか思えないんだ。

間。

客席がふと明るくなったような気がした。

紅谷　なるほど。

立原　離人症（りじんしょう）ってやつかな？

紅谷　あら、そんな言葉、よく知ってるのね。

立原　自分なりに精神関係の本を読んだからね。

紅谷　他にはどんな？

立原　笑わないで聞いてくれよ。時々、自分が生きているのか死んでいるのか分からなくなるんだ。すべての現実がどうでもよくなってね。ところが、……なあ、笑わないで聞いてくれよ。

紅谷　もちろん。

立原　朝、新聞を開くだろう。小さな記事で、誰かが死んだなんてのを読むと、突然、来るんだ。毎朝、運ばれているこの紙の束には、なんて多くの悲鳴が詰まっているんだろう。そう思ったら、もうだめなんだ。ひとつひとつの記事を読むたびに、涙が止まらないんだ。今まで、平気で読んでいた自分が許せなくて、余計に悲しくてたまらなくなるんだ。

紅谷　いつからそんなふうに？

立原　ここ半年ぐらいかな。……狂っちゃったかな？

紅谷　何言ってるの。本読んだのなら、書いてあったでしょう。狂っちゃったなんて言ってる人は、「病識（びょうしき）」があるんだから大丈夫なの。自分がおかしいかもしれないっていう「病識」がなくなったら、問題なの。

立原　そういう時もあるんだ。

紅谷　えっ？

立原　一日のうち、意識がなくなる時間がだんだん増えてるみたいなんだ。最初は、ほんの数分だったはずなんだ。それが、十分になり、二十分になり、一時間を越してるんだ。それと、

紅谷　それと？

立原　意識がない間に、その、何かをしてるんだ。変な文章を書いたり、何か、でも、全く、記憶がないんだ。

紅谷　なるほど。雅人君、今、仕事は？

立原　フリーのライターをやってる。

紅谷　作家？すごいじゃない。

立原　違うよ。フリーのライターが書くのは、よく雑誌なんかであるだろう。新製品が出たとか、デートスポットはここだとか、簡単に読み捨てられるやつさ。

紅谷　作家じゃないの？

立原　詐欺みたいな商売さ。最低の映画だと思ってるのに、「このシーズン、最大の話題作」なんて記事書くんだ。書きながら、思ってることとあんまり違うから手が震え出すこともあるよ。

紅谷　どうしてそんな仕事を？

立原　どうして？そりゃあ、作家になるためさ。

紅谷　うん。だから、どうして作家に？

立原　どうしてって、だから、だから、

立原、苦しそうな表情を始める。

紅谷　（はっと）どうしたの？

立原　いや、だから、（苦悩に抗おうとして）だから（苦悩が深まる）……

紅谷　（医者らしく）言わなくていいわ。大丈夫、今日はここまでにしておきましょう。

立原　えっ？

紅谷　ゆっくりと話し合いましょう。精神安定剤を出しときましょうか。

立原　えっ、あの、

紅谷　大丈夫。副作用はないやつね。無理に飲まなくてもいいから。

立原　……ありがとう。

紅谷　飲んだら眠くなるから、そのまま、がっと寝るといいわ。仕事しようなんて思っちゃだめよ。

紅谷、カルテを書き始めようとする。と、立原、

立原　どこかへ行きたいんだけど、それがどこか分からないって思うことはないかい？

紅谷　えっ？

立原　何か忘れているはずなんだけど、それが何か分からない。誰かを愛しているはずなんだけど、それが誰だか分からない。そう思うことはないかい？

紅谷　……それが作家になりたいと思った理由？

立原　僕が意識をなくした時に、もう一人の僕がメモを残していたんだ。

紅谷　なんて書いてあったの？

立原　……「私は他人である」

明かりが落ち、紅谷だけが浮かび上がる。

立原は後ろに下がる。

紅谷　それが久しぶりの再会でした。彼とは、一週間に一回は会うことに決めました。離人症は、統合失調症の一歩手前の症状であるという学説があります。自分が自分でなくなり、もう一人の自分が別の場所に存在している。平凡なサラリーマン、平凡な学生という仮面を取って、本当の自分を出そうとしているのに、みんなが反対して邪魔されている。統合失調性の妄想はすぐ近くにあります。私は彼と慎重につきあおうと決めたのです。

紅谷の姿、ふっと消え、後藤参三が現れる。

2

後藤　彼女の話では、私はその数日後に登場します。……胸をえぐられるような噂を聞き、眠れぬ夜を過ごすことがあります。思い余って、誰がそんなことを言ったのだと問い詰め、噂をたどれば、当人はそんなことは言ってないと言う。ただ悪意の自覚のない噂だけが存在し、言ったという人間は存在しない。ですが、そこには、きっと真実があるのです。誰が言ったのかというような事とは違う種類の真実が。……偶然の再会は、こんな形でした。

明かりが広がる。
立原、興奮している。
手には、請求書のような紙。（マイムでも可）
（紅谷は去っている）

立原　２５万８千円！？おい、冗談、言うなよ。こっちは、ビール二本とおつまみ三つぐらいだぞ。それを、

立原、マイムで脅される格好。
胸ぐらをつかまれ、殴られ、サイフを取り上げられる。
それを片隅から見ている後藤。安っぽいアフロヘアのカツラをつけている。
止めに入りたいが、立原をいたぶっている人に気押されて、どうにもできない。

立原　なにをするんだ！やめろ！返せ！財布を返せ！

立原、何発か殴られて放り出される。後藤、辺りを伺い、さっと近づき、立原の服の汚れを、払おうとする。
立原、うめきながら、

立原　な、なんだ！身ぐるみはぐっていうのか！？

後藤、黙って立原の手を取り、立たせようとする。
服の汚れを払いながら、

後藤　こんな所に来ちゃだめじゃないの。知らないお店に入るなんてチャレンジャーすぎるわよ。さ、行きましょう。

立原　金取った上に説教か！みてろ、警察に言うからな！

後藤　ばかねえ。証拠なんてないでしょう。無駄なことよ。さ、歩ける？

立原　ほっといてくれ！

後藤　送っていくよ、雅人。

立原、びくんとする。

後藤　タクシーひろうからね。ちょっと、待っててね。

立原　おい、お前、今、俺の名前言ったな。どうして、知ってるんだ？

後藤　だって、高校の時の同級生なんだもん。

と、後藤、アフロヘアのカツラを取る。

立原　……おまえ、お前、参三か！参三！参三じゃないか！お前、こんな所で何してるんだ？！

後藤　だから、タクシーひろってるのよ。

立原　そうじゃないだろう！おまえ、この店にいたよな！

後藤　お酌までしたじゃないの。

立原　この店で働いていたよな！

後藤　ビール瓶の栓、全部、歯で開けてたのは私よ。雅人、手叩いて喜んでたじゃないの。

立原　お前、この店で騒いでたよな！

後藤　金魚の一気飲みしたのは私よ。雅人、チップくれたじゃないの。

立原　お前、この店で何してるんだ！

後藤　（堂々と）おかまよ。

間。
見つめ合う二人。

後藤　あら来たわ。タクシー！

後藤、腰をちょっとひねって手を振る。
なんとなくかわゆい仕種。
光落ち、後藤にだけ明かりが当たる。

後藤　そして私は、彼のマンションに行きました。

立原のマンション。

立原　どういうことだ、一体！
後藤　だから、テーブルチャージが１０万円で、ビール一本３万円でしょう。それが二本で６万円で、
立原　そんなことじゃない！どうして、お前があんな店にいたのかってことだよ！

後藤、財布を立原に差し出す。

後藤　はい。
立原　えっ……これは。
後藤　レジから取り返してきたのよ。
立原　お前……。
後藤　あのお店、ヤクザが仕切ってるの。カードなんか、大変なことになる所だったんだから。（室内を見回して）わあー、すごい本、仕事、何してるの？
立原　仕事はちょっとした、いや、話をごまかすんじゃない！お前、高校の時から、その、
後藤　なに？

立原　いや、その……
後藤　ゲイだったのかって？
立原　……ああ。
後藤　そんな大切な個人情報、簡単に答えるわけないじゃない。まさか、作家なの？！雅人、作家になったの？
立原　フリーのライターだよ。
後藤　コラム専門の？
立原　詳しいな。それも、無署名記事専門だ。
後藤　そっか。雅人がねえ。あんときさ、
立原　え？
後藤　最後の屋上でさ、三人で青春したじゃない。将来の夢とかって。
立原　あたし、何言ったか覚えてる？
後藤　作家だろう。
立原　すごーい。さすが雅人。胸、きゅんとしちゃう♡
後藤　……本気か？
立原　いじわるねえ。あたし、これでも売れっ子なのよ。オネエターミネーターのしゅわ子って言ったら、二丁目じゃ有名なんだから。
後藤　しゅわ子？
立原　うふ♡
後藤　……本気か？
立原　いつからそんなにいじわるになったの？
後藤　いつから「しゅわ子」になったんだ？
立原　あわてない、あわてない。あとで寝る時に教えてあげるわ。
後藤　えっ？
立原　あら、ベッドがひとつしかないわ。
後藤

立原、動きが止まる。

立原　泊まっていくのか！？
後藤　当り前でしょう。お店を途中で抜け出して、あなたの財布、盗んで来たのよ。今ごろきっと大騒ぎよ。
立原　お前の家は？

後藤　お店の二階なのよ。ま、いいわ。大した物ないから。あ、でもケリー・バッグだけは別ね。そのうち、忍びこもおっと。さ、寝ましょう。

立原　……あ、今日はサウナに行こうと思ってたんだ。参三、悪い。今日は、半年に一度のサウナの日なんだ。半年に一度はサウナに行けっておばあちゃんの遺言なんだよ。おれ、おばあちゃん子だからさ。泊まってっていいから。じゃ、俺、いくわ。

後藤　雅人、座りなさい。

立原　じゃ、行くから。ゆっくりしてってね。

後藤　（ドスをきかせて）ここに座らんかい！

立原　はい。

思わず、素直に座る立原。

後藤　ゲイとして一番悲しいことが何か分かりますか？

立原　あ、いえ、

後藤　じつはゲイなんだと同性の友人にこっそり打ち明けて、その瞬間、身を固くされることです。いいですか？そういう人は、女性の友人から「好きな人がいるの」と相談されると、すぐに自分のことだと思い込んでしまう人と同じです。

立原　ほお。

後藤　相談をもちかけてくる女性は、みんな、自分のことを好きだと思い込んでいる人と同じなんです。そんな人のことをどう思いますか？

立原　自意識過剰。

後藤　そうです。その女性は、あなたの親友や先輩、後輩のことが好きで相談に来たのかもしれないのです。なのに、相談があると言われた瞬間に、すべて、自分のことだと思い込む人は？

立原　ナルシスト。

後藤　そうです。なかには、「好きな人がいるの」と女性が言った瞬間に、頭の中でホテル代を計算して、トイレで財布の中身を確かめる人がいます。そういう人は？

立原　ばか。
後藤　そうです。中には、「好きな人がいるの」と言われた瞬間に、股間をもっこりさせる人がいます。そういう人は？
立原　いい奴。
後藤　違います。ただのアホです。分かりましたね。ゲイが同性の友人に打ち明けたからと言って身を固くするバカバカしさが。
立原　はい、先生。目からウロコが落ちました！
後藤　よろしい。私はしゃべり過ぎて喉がかわきました。
立原　ありがとうございます。何か飲みますか？お水は……。

立原、冷蔵庫を開けて、ミネラルウォーターを出すマイム。

後藤　しかし、人間として生まれてきた以上、ぬくもりだけでもいいから欲しい時はありますね。
立原　は？
後藤　朝起きたら、後悔するのを分かっていて、それでも、ぬくもりが欲しい時がありますね。それが、
立原　えっ？
後藤　人間ですね。

後藤、立原を見つめる。

後藤　うふっ♡
立原　（慌てて）参三、冗談なのか本気なのか分からないことは言うんじゃない！混乱するだけなんだからな！
後藤　雅人、新しい世界に飛び込んでみませんか？
立原　飛び込まない！俺は飛び込みもバンジージャンプも苦手なんだ。
後藤　ウェルカム、ニューワールド！

参三、近づく一瞬、チャイムが鳴る。

立原　はーい！

と、立原、脱兎のごとく走りドアを開ける。
紅谷が立っている。

3

紅谷　こんばんわ。あー、よかった。いたんだ。
立原　ど、どうしたの、礼子。いや、紅谷先生。
紅谷　礼子でいいわよ。何言ってんの。昨日、診察、すっぽかしたでしょう。ずっと待ってたのよ。
立原　あ、ごめん。ちょっとね。
紅谷　来週は来るんでしょう。それとも、今週、予約する？
立原　うん……礼子、入らないか？ちょっとコーヒーでも。
紅谷　いいのよ。心配だから、直接、顔、見たかっただけなんだから。
立原　まあ、そういわずに、さ、さ、
紅谷　そう？あら、お客さん？

紅谷、軽く後藤に会釈しようとして、その途中で、体、硬直する。
それは、後藤も同じ。
二人、同時に、

二人　やだー！

二人同時に、立原に向かって、

二人　どうしてどうして、ねえ、どうして！？
立原　いや、だから、あのね、
紅谷　（後藤に）やだあー！
後藤　（紅谷に）やだあー！

紅谷　やだやだやだー！
後藤　やだやだやだー！
紅谷　元気だったー？！
後藤　うん。元気だったー！？
紅谷　元気、元気！元気？
後藤　元気、元気、元気？
二人　（立原に）どうして言ってくれなかったのよー！もー、ぷんぷん！
立原　いや、だから、あのね、
後藤　礼子、相変わらず白ーい！
紅谷　参三、相変わらず黒ーい！

（役者の特徴をどうぞ。「相変わらず低いー！」「相変わらず高ーい！」「相変わらずじみー！」「相変わらず派手ー！」などなど）

二人　やだー！
後藤　礼子、今、なにやってるの？
紅谷　あたし？精神科医！
後藤　すっごーい！お医者さんになったんだー！
紅谷　参三は？
後藤　あたし？ゲイバーの元店員！
紅谷　すっごーい！ゲイバーの元店員になったんだー！
後藤　あんた、その言い方、変よ。
紅谷　あんたも、その言葉使い、変よ。
後藤　しょうがないじゃない。だって、ゲイバーの元店員なんだから！
二人　やだー！
紅谷　いろいろあったのね。
後藤　礼子もね。
紅谷　うん。雅人、ビール！
立原　えっ？
紅谷　飲むしかないでしょう！

後藤　あたし、ワインがいい！
紅谷　とことん飲むぞー！
後藤　やーん！

再会の宴。
ひとしきり盛り上がる三人。
やがて……。

立原　あ、もうビールないや。ちょっと買ってくるね。
後藤　あたしが行こうか？
立原　いいよ。すぐだから。

立原、二人から数歩、後ろに下がる。そして、そのまま、
二人のやりとりを見つめている。
紅谷と後藤、微笑み合い、

後藤　礼子、あたし驚いちゃった。
紅谷　えっ？
後藤　まだつきあってるんだ。
紅谷　えっ？（少し笑って）違うよ。そんなのは、ずっと昔のことよ。
後藤　えっ、じゃあ、どうしてここにいるの？
紅谷　ちょっとね……
後藤　ごまかさなくていいわよ。つきあってるんでしょう？
紅谷　違うの。雅人は……
後藤　（ピンときて）えっ？まさか礼子の患者なの？
紅谷　……。（あいまいな反応）
後藤　そうなんだ。ちょっと待って。じゃあ、礼子と雅人は、大学行って、
紅谷　離ればなれになって、それっきりよ。
後藤　何よ、それ。じゃあ、私の努力はなんだったのよ。
紅谷　えっ？
後藤　えっ、いえ、二人の愛がずっと続きますようにって、祈ってたの

よ。

紅谷　ありがと。でもね、なんていうか、たぶん、愛じゃなかったのよ。

後藤　えっ、あんた、それ、大胆な発言よ。

紅谷　だって、たぶん、そうなんだもん。

後藤　じゃあ、愛じゃなかったら、なんだったの？

紅谷　さあねえ。

後藤　性欲？

紅谷　（しげしげと後藤を見る）

後藤　なによ？

紅谷　そんな会話ができるようになったんだなあって。

後藤　何言ってるの。女一人、いろいろあったでしょう。

紅谷　参三もね。

後藤　いろいろね。

紅谷　いろいろね。

二人、見つめ合い、少し微笑む。

少しの沈黙。

やがて、

後藤　高校時代、クラスに本当の意味で友達なんかいませんでした。それが当然だと思っていました。そうやって、僕の十代は終わるんだろうと決めていました。

紅谷　ただ、相槌をうち、笑い合い、会話に聞こえる独り言を繰り返していれば毎日は過ぎていきました。それはそれで、虚しく、楽しい日々でした。きっと、人生はこういうもので、これ以上なにかを求めても、それはきっと、ないものねだりだと思っていました。

後藤　ただ、なにかにいつも苛立っていました。なにがこうも自分を苛立たせるのか。教師の何気ない一言なのか。母親のいつもの繰り言なのか。厳し過ぎる無意味な校則なのか。

紅谷　人によって態度を使い分けるあいつなのか。悪口と噂話しか出て

後藤　こないあの唇なのか。どうしても演じてしまうこの顔なのか。
校長が代わって、無意味な校則はさらに厳しくなりました。校長は、どうして服装が乱れると不良になるのかを説明する代わりに、屋上のタバコの本数を上げました。私がこの高校に赴任する前はかなりの本数が落ちていた。なのに、校則を厳しくしてからは、一本も落ちてないと。社会には、ルールがあるのだと。

紅谷　校長が朝礼でそう演説した夜、私は父親の灰皿から吸殻をこっそり集めました。

後藤　なじみの喫茶店のマスターに頼んで吸殻をもらったのです。

紅谷　そして、次の朝、屋上へ走りました。

後藤　そこに、

二人　あなたがいたのです。

後ろの立原に光が当たる。
二人、立原を見つめる。

紅谷　私達はお互いに驚いていました。

後藤　同じことを考えていた人間が、この学校にいたんだ。クラスも違うし、話をしたこともありませんでした。でも、同じことを考えた人間がいたんだ。

立原　吸殻を持ったまま、僕達三人は、見つめ合っていました。

紅谷　空は曇ってはいましたが、

後藤　穏やかな風が僕達三人を結びつけました。

立原　それが

後藤　僕達の

紅谷　始まりでした。

立原、突然、

立原　さあ、ビールだ。一杯買ってきたから朝まで飲めるよ。

紅谷　そんなにはだめよ。あたし、明日も仕事なんだから。

立原　ま、ゆっくりしてってよ。

後藤　雅人はどこが悪いの？

間。

紅谷　（とりつくろうように）ちょっとね。たいしたことじゃないのよ。

立原　……離人症っていうのかな。自分が自分でないみたいなんだ。

後藤　みんなお隣さんに思えるの？

紅谷　えっ？

後藤　隣人症なんでしょう。

立原　違うよ。離れるに人と書いて離人症だ。

後藤　というと？

立原　だから、こうやって話していても、なんだか、とても現実とは思えないんだ。まるで、映画か演劇のワンシーンみたいに、喋っている自分を見つめているもう一人の自分がいるんだ。

後藤　どこに？

立原、自分の後頭部を指差す。

立原　ここに。

後藤　なんだ、じゃあ、あたしと同じじゃない。

二人　えっ？

後藤　あたしだけじゃないわよ。きっとみんなもそうよ。

紅谷　どういうこと？

後藤　どういうことって、礼子だってそうでしょう。どんなことしてても、もう一人の自分がいるじゃない。愛する人に抱かれていても、別な男のこと考えてる自分がいるでしょう。

紅谷　嘘う！？

後藤　また、このうんこインテリが。

紅谷　どういう意味よ。

後藤　うんこくさいインテリのことよ。頭で考えちゃだめなのよ。体使わないと。

紅谷　参三は、筋肉だけじゃなくて、脳味噌も使ってね。
後藤　あんた、「蜘蛛の巣ボランティア」って呼ばれてるでしょ。
紅谷　なによ、それ？
後藤　ボランティアだけが生きがいの、あそこに蜘蛛の巣が張ってるような女ってことよ。図星でしょう！ね、あそこに蜘蛛は何匹飼ってるのる？餌はなに？淋しさ？孤独？コージーコーナーのシュークリーム？可哀相な礼子。応援したげる。フレー！フレー！うんこインテリ礼子！
立原　おい、苦情が来るよ。
紅谷　参三、あんた酔っぱらってるでしょう。
後藤　嬉しいのよ。こうやって三人そろうなんて、あの最後の屋上以来じゃないの。
紅谷　ほんと、ほんとよね。
後藤　（立原に）どう、これでも、現実じゃないみたいに思える？
立原　えっ（なんと答えようかと戸惑って）いや……
紅谷　（はっと）そうよ。どうして、昨日、来なかったの？
立原　いや……
後藤　もう何回目なの？
紅谷　まだ一回よ。昨日で二回目になるはずだったの。
立原　玄関を出た所までは記憶があるんだ。
二人　えっ？
立原　……確かに玄関は出たんだ。階段を降りて、気がついたら、また部屋の中にいたんだ。
後藤　それで？
立原　夜になってた。

間。

紅谷　何時間ぐらいたってたの？
立原　５時間ぐらいかな。
紅谷　明日。時間取るから病院の方に来て。そこでゆっくり。
立原　（不安そうに）ああ。

紅谷　そうか。困ったわね。迎えに来たいんだけど、私も仕事があるし……

後藤　大丈夫よ。私が責任を持って病院へつれて行くから。

紅谷　ありがとう、参三。でも、これから先をどうするか決めないとね。

後藤　これからもずっとつれていくから。大丈夫よ。

紅谷　えっ？

後藤　あたし、ここに住むから。

紅谷　えっ？

紅谷、しげしげと後藤と立原を見比べる。

立原　（はっと）違う！違う！そうじゃないんだ！

後藤　ぽっ♡

立原　なにかぽ♡だ！やっていい冗談とやっちゃいけない冗談があるんだ！

後藤　ごめんね。雅人、素直じゃないから。

紅谷　ははははは。（と力なく笑う）それじゃ、あたし、おじゃまみたいだから。

紅谷、腰を浮かそうとする。

立原、さっと紅谷の側に近寄って、

立原　待って！礼子、そこまで送っていくよ。

紅谷　大丈夫よ。子供じゃないんだから。

後藤、立原の手をむんずと掴んで、ぐいと自分の方へ引っ張る。

後藤　そうよ。私達はもう高校生じゃないんだから。もう大人よ、ね。

紅谷　え、ええ。

立原　礼子！

後藤、そのまま、立原をはがい締めにする。
出ようとする紅谷に、

立原　待って！待って下さい！まってえ！
紅谷　（後藤に）……泣いてるわよ。
後藤　涙は悲しい時だけに流れるものじゃないのよ。
紅谷　それじゃあ。明日。必ずつれて来てね。
後藤　まかせて！

紅谷、去る。

立原　待って、礼子――！

後藤、すっと手を放し、

後藤　（あっさりと）さ、寝ようか。

えっ？と後藤を見る立原。

後藤　（少し笑って）冗談だよ。相変わらずだなあ、お前は。
立原　えっ？
後藤　真面目だってことだよ。俺、こっちの床で寝るわ。毛布貸してくれよ。
立原　あ、ああ。

立原、明かりを消すアクション。
真っ暗。

後藤　「（声）じゃ、おやすみ。」
立原　「（声）お、おやすみ。」

沈黙。

後藤　（声）……ちょっとだけ、試してみるか？

立原　（声）（悲鳴）

明かりつく。

立原、中途半端な空手のような珍妙なポーズで構えている。

後藤　（微笑んで）これでも、現実じゃないみたい？

立原　別な意味で、現実じゃないみたいだ。

暗転。

明かりつく。

4

紅谷の診察室。

紅谷が、立原の話を聞いている。

紅谷　昨日はよく眠れた？

立原　礼子。

紅谷　なあに？

立原　お前、初体験の時、どうだった？

紅谷、質問に絶句する。

が、すぐに、どうして質問したのか、気づき、

紅谷　……雅人、あなた……

立原　（はっと）違うよ！全然、違うよ！参三が来たらどうしようってずっとフトンをかぶって体固くしてたんだ。眠れるわけないからさ。で、ぎゅっと体に力いれてじっとしてると、いろんなことが

浮かぶじゃない。もし、襲われたらどうなるんだろう。なにが起こるんだろう。そう思ってると、あれ、これって好奇心ってことじゃないか。えっ、俺は好奇心わいてるのか？でも、同時に恐怖心もわくんだ。もし一線越えちゃったら世間からなんて言われるんだろう。でも人生、一回しかないしな、でも、愛はないよな、でも体から始まる愛もあるよなって一晩中考えてたら、あれ、これって女性が初体験する前にさんざん考えることと同じじゃないかって思ったんだ。（素朴に）礼子はどうだった？

紅谷　……

紅谷、呆れて、言葉が出てこない。

立原　偉いよなあ。どうして飛び込めたの？

紅谷　さ、今日の診察はここまでです。お疲れさまでした。

立原　まだ始まって5分もたってないよ。

紅谷　だんだん回復してきましたね。おめでとう。

立原　医者と患者はなんでも話すんじゃなかったの？

紅谷　そうですね。あなたが一線を越えたらお互い話しましょう。来週ですか？

立原　……いじわる。

紅谷、立原を見て、にっこりと微笑む。

紅谷　本当に体調がよさそうね。

立原　ああ。睡眠不足だけど、朝食をちゃんと取ったからね。

紅谷　参三？

立原　起きたら、ちゃんとした食事ができてるんだ。日本旅館の朝食みたいなすごいやつ。

紅谷　へえ。

立原　それがまた、困ったことに、

紅谷　なに？

立原　うまいんだ。

紅谷　いいじゃないの。美味しい食事は、メンタルにも大切なことよ。

立原、ふと真顔になって、

立原　診察、始めていいよ。

紅谷　こうやって、いろんな話をしてるのも治療なの。

立原　今日は大丈夫だから。

紅谷　焦らない、焦らない。

立原　原因は分かってるんだ。

紅谷　えっ？

立原　恥ずかしい話だけど、この年になっても、未だに、自分が何をしたいのか僕には分かってないんだ。でも、もう一人の僕、本当の僕には分かっているんだ。ただ、それだけのことなんだ。

紅谷　なるほど。

立原　それが離人症の原因なんだ。だから、簡単なことなんだ。

紅谷　簡単？

立原　ああ、本当の僕が何をしたいのか分かれば、それでいいんだ。

紅谷　なるほど。

立原　なるほどばっかりだね。

紅谷　あんまりはっきりと分析してるから、感心してるのよ。これじゃ、医者はいらないみたい。

立原　違うよ。礼子は僕に、どうやったら本当の僕がしたいことを知ることが出来るか、教えてくれればいいんだ。

紅谷　それは難問ね。

立原　どうして？

紅谷　だって、私は雅人君じゃないんだから。私は他人なんだから。

立原　そんな……そうだ、そうだね。礼子は他人なんだ。

紅谷　大丈夫。時間をかければ、必ず分かるわよ。

立原　……少し、頭が痛くなってきた。

紅谷　（さっと）話題を変えましょう。「趣味は？」って聞かれたら、なんて答える？

立原　（それを無視して）礼子はどうして、精神科医になったの？

間。

かすかに、医者と患者の立場が逆転する匂いがする。

紅谷　私？

が、匂いは一瞬のうちに消える。

立原　驚いたんだぜ。だって礼子、医学部じゃなかっただろう。

紅谷　ええ……。

立原　たしか、礼子、大学時代、あの……

紅谷　宗教？

立原　ごめんよ。言いたくないんならいいんだ。

紅谷　いいのよ。患者と医者はなんでも話すんだから。大学入って、つまんないつまんないってふらふらしてたのね。教授は自分の本、読んでるだけだし。普通はサークルに入って気分を紛らわすんだろうけど、私はだめだったの。男の視線だけを意識してる女と、女のことしか考えてない男の中でさ、何していいか分かんなくなっちゃったの。

立原　礼子は、潔癖だったからな。

紅谷　そこに、すっと入ってきたのよ。

立原　噂には聞いてた。

紅谷　二年目の春かな。お互い、ほとんど電話もしなくなってたでしょう。

立原　うん。

紅谷　ヤバイっていう予感はあったのよ。でも、すぐそこだからって連れていかれたら、みんな、私に向かってなんて叫んだと思う？「おかえりなさい！」よ。澄んだ目をした人達が、次々に「おかえりなさい！」「おかえりなさい！」「おかえりなさい！」……

立原　私、たぶん、疲れてたのね。それからは、あっという間。

紅谷　うん。

でもね、一番の理由は、その宗教が、セックスを拒否してたから

なの。セックスは、罪悪なんだ、悪魔の仕業なんだって説明されて、心底、ほっとしたの。ああ、私の居場所は、ここなんだって思ったの。

立原　どうして？

紅谷　まだ、うまく言えない。

立原　それから？

紅谷　三年かな。アパートも引き払って、授業も出ないで、日本中、回ったわよ。伝道と販売の旅。

立原　どんな気持ちだったの？

紅谷　使命感かな。熱病に冒されたような状態。私が頑張らないと、この世界は滅ぶって本気で信じてた。

立原　……どうしてやめたの？

紅谷　どうしてかなあ。今でも分からない。ダメよね。精神科医がこんなこと言ったら。こんな医者じゃ、不安になるでしょう？

立原　大丈夫。医者と患者はなんでも話すんだから。

紅谷　気がついたら、教祖を愛せなくなったの。みんなを愛するんじゃなくて、私を愛して欲しいって思ったからかな。

立原　なるほど。

紅谷　（微笑んで）強欲でしょ。

立原　……それで？

紅谷　こたえたわ。やめた後、あんまり虚しくてね。半年ぐらい、部屋を出る気力もなかった。自殺なんてパワーが残っている証拠だからね。

立原　うん。

紅谷　でもね、あんまり虚しくてさ、ボーッと天井を見上げてたら、ある日、笑っちゃったの。このまま廃人になるなら、何のために生まれて来たんだろうって。「人生の意味」はないのかって。虚しさが「人生の意味」なんて絶対嫌だって。で、大学、再受験よ。

立原　見つかった？

紅谷　えっ？

立原　人生の意味。

紅谷　そんな簡単に見つかれば、私は……（おどけて）教祖になってる

わ！

ふっと微笑む二人。

立原　礼子、今、恋人は？
紅谷　どうしたの？
立原　いるのか？
紅谷　一応ね。
立原　幸福か？
紅谷　何、その言い方。じゃ、雅人は？
立原　一応ね。
紅谷　参三？
立原　ちがーう！
紅谷　はっきりさせないとかわいそうよ。
立原　何をはっきりさせるんだよ。
紅谷　私、いいと思うけどなあ。

と、ノックの音。

紅谷　はい。

後藤が入ってくる。

紅谷　参三、どうしたの？
後藤　……淋しい。
二人　はあ？
後藤　二人でえんえん喋ってるんだもん。しゅわ子、淋しい。
立原　今、診察中なの。
紅谷　いいわ、今日はここまでしましょう。
立原　先生！
紅谷　すがるような目はやめなさい。
後藤　さ、帰りましょう。

紅谷　それじゃ、お大事に。

紅谷、去る。

5

立原のマンション。

後藤　さ、晩ごはん何がいい？

立原　なんでもいいよ。

後藤　だめよ。栄養あるもの食べて、休まないと。何でも食べたい物言って。

立原　なんでもいいって。

後藤　じゃあ、お肉買ってくるね。待っててね。じっとしてなきゃだめよ。

立原　子供じゃないんだから。

後藤　病気の時は、みんな子供なの。

後藤、いなくなる。

一人になる立原。

少し、顔が歪んでくる。

光、立原に集まる。

なにかが、ぐにゃりと曲がり、きしむ感覚。

少しの時間が流れる。

やがて、後藤、帰って来る。

後藤　ただいま。大人しくしてた？

立原　……

後藤　オージービーフ１キロも買ってきちゃった。一人５００グラムね。

立原、じっと後藤を見ている。

後藤　何？やだあ。照れるじゃないの。

立原、穏やかに威厳を込めて、

立原　……あなたは誰です？
後藤　えっ？何言ってるの。その手には乗りませんよーだ。
立原　あなたは私の世話をする人ですか？
後藤　はいはい、お世話しますよ。
立原　あなたは中国からいらしたのですか？
後藤　えっ？
立原　……あなたは中国の宦官の方ですか？
後藤　カンガン？
立原　狭い所で苦労をかけます。ですが、もうすぐ楽になりますよ。

立原、出て行こうとする。

後藤　どこ行くのよ。もうすぐ晩ごはんよ。
立原　失礼。

後藤、止める。

後藤　ちょっと待ってよ。どうしたのよ？
立原　放しなさい。失礼ですよ。
後藤　どこ行くのよ。それだけ言いなさいよ。
立原　私の家です。
後藤　ここじゃないの。何言ってるの。
立原　違います。本当の私の家です。
後藤　雅人、もう一軒、家があったの？
立原　人違いです。私はそのような名前ではありません。
後藤　何言ってるのよ！
立原　放しなさい。私には本当の家があるのです。

後藤　どこに行くのよ！
立原　皇居です。
後藤　……えっ？
立原　皇居が、私の本当の家なのです。
後藤　雅人、あんた……。
立原　中国の人、私の名前は雅人ではありません。私は、南朝正系第百二十代立原天皇である。

後藤、ゆっくりと手を放す。

後藤　……なんですって？
立原　私は南朝後亀山天皇二十ニ代直系立原天皇である。

後藤、一瞬、立原を見つめ、

後藤　へへっー（と土下座して、すぐに立ち上がり）んなことしてる場合じゃないのよ。
立原　もういいですか？

と、出て行こうとする。

後藤　立原天皇、あの皇居行って何するんです？
立原　決まっているでしょう。北朝の方に出て行ってもらうのです。正統ではない方が皇居にいてはいけないでしょう。
後藤　はあ。あの皇居の場所はお分かりですか？
立原　一昨日、下見をしてきました。非常に分かりやすい場所にありました。それでは、失礼します。
後藤　ち、ちょっと待って下さい。分かりました。私がタクシーで皇居までお送りしましょう。
立原　そうですか。皇帝ではなく天皇の世話をする宦官とは珍しいですね。
後藤　えっ？ええ。珍しいんです。私って、とっても珍しいんです。

立原　そうですか。ではお願いします。
後藤　その前にステーキを……

立原、部屋を出ようとする。

後藤　そうですよね。さあ、行きましょう。あの、立原天皇、
立原　陛下でいいですよ。
後藤　陛下、途中、病院に寄ってもいいでしょうか。私、最近、便秘気味で、お通じのお薬を貰おうと思いまして。
立原　すぐですか？
後藤　すぐです！
立原　分かりました。さあ、行きましょう。

立原、後藤、去る。
暗転。
暗闇の中、声だけが聞こえる。

後藤（声）　礼子！礼子！
立原（声）　こら、何をする！放せ！私は立原天皇であるぞ！こら！宦官！私を助けなさい！放せ！

明かりつく。

6

診察室。
紅谷と後藤。
後藤、混乱している。

紅谷　（少し微笑んで）なんとかなるわよ。大丈夫。大丈夫。
後藤　……本当に狂っちゃったの？
紅谷　統合失調性妄想っていう症状なの。自分のことを天皇だって言う

のは、わりとポピュラーなのよ。

後藤　本当？

紅谷　昔は大抵、天皇だったって。ずっとなかったんだけど、最近、また増えてきたみたい。

後藤　……。

間。

紅谷　しばらく入院して様子を見ましょう。

後藤　あたし、付き添っててもいい？

紅谷　だめなの。医者と看護師に任せて、面会に来て。

後藤　あたし、看護師になる。勉強するわ。

紅谷　何年もかかるのよ。

後藤　ね、特例で。付き添わして、お願い。

紅谷　雅人のことが本気で好きなの？

後藤　何言ってるの。親友が天皇になったのよ。ほら、私、腕力あるし。もしあの人が暴れても私なら大丈夫だから。

紅谷　でもねえ……

後藤　じゃあ、私、入院するわよ。私はマリーアントワネットである。おっほほ。お前達、お菓子を食え！とらやの羊羹を食え！……どう？

紅谷　分かったわよ。ま、考えるわ。

後藤　ありがとう、礼子。今度、いい「ゲイバー」紹介するね！

後藤、嬉しそうに去る。

紅谷　ねえ、それがお礼？あんまりじゃない？……それから二日、彼は眠り続けました。

暗転。

7

すぐに明かり。
病室。
ベッドに横たわった立原が見えてくる。
参三が編み物をしながら傍にいる。
立原、うめき、やがて、意識を取り戻す。

後藤　気がついた？
立原　……ここは？
後藤　病院よ。

立原、上半身を起こす。
うっと頭が痛む。

後藤　大丈夫？無理しない方がいいわよ。

立原、ベッドから降りようとする。

後藤　だめよ。まだ安静にしてないと。
立原　皇居に行かないと。

後藤、はっと体を強張らせる。

後藤　それがね、……それが、じつは陛下、警察の手が回っているのです。今行けば、捕まってしまいます。
立原　……警察？
後藤　はい。どうやっても、皇居の中にまで入れそうにありません。
立原　……おのれ、卑怯なり北朝。
後藤　ですから、ここでしばらくお休みになられた方が得策かと。
立原　お前は北朝の手の者ではないのか？
後藤　どうしてですか？

立原　ここに連れてきたのはお前だ。
後藤　陛下には申し訳ないことをしました。じつは、あの時、警察が待っているという情報が入っていたのです。ですが、陛下はあの時、どう言ってもお聞きわけならないようでしたので、断腸の思いで、このような手段を使いました。
立原　そうか。中国の人、名はなんと言う？
後藤　陛下、私は別に中国の人ではありません。日本の人です。
立原　そうか。日本人なのに宦官か。いろいろあったのだろうなあ。して、名は？
後藤　……しゅわ子と言います。
立原　周・輪子か。やはり、中国ではないか。
後藤　まあ、陛下ったら。そのボケ、いただき。
立原　しかし、どうしたものか。このままでは、この国は間違った天皇を天皇として奉（たてまつ）り続けねばならない。
後藤　陛下。
立原　なんです。
後藤　このさい、耐え難きを耐え、忍び難きを忍び、陛下が天皇をお辞めになるというのは、いかがでしょう。
立原　……周。天皇は偉いか。
後藤　はい。それはもう。
立原　何故だ？
後藤　何故って……何故でしょう？
立原　理由もないのに偉いのか？
後藤　いえ、あの、そうだ、憲法に国の象徴だと書いてあるからです。
立原　なぜ象徴になるのだ？
後藤　偉いからです。
立原　だから、何故偉いのだ？
後藤　だから……何故でしょう？
立原　理由もないのに、象徴になるのか？
後藤　いえ、あの、あっ、そうだ、ずっと家系が続いているからです。
立原　そうだ。南朝ならそれは言える。だが北朝はそうではない。奸賊足利義満の武力によって北朝は後亀山天皇を裏切り、三種の神器

を奪い取った。

後藤　はあ。

立原　天皇をやめるのは、北朝の方なのだ。分かったかね。周。

後藤　はあ。なんとなく。

立原　それでは、どうしたらいいのか考えて下さい。私は少し眠ります。疲れました。

後藤　はい、陛下。ゆっくりとお休み下さい。

立原、ゆっくりと目を閉じる。

（ベッドは引っ込む）

8

診察室。

紅谷、出てくる。

後藤　一発で治る薬ってないの？

紅谷　無茶言わないの。統合失調症自体、どうして起こるか、肝心なことは分かってないんだから。

後藤　医学は進歩してるんじゃないの？

紅谷　私達の心は、まだまだ、分からないことが一杯なの。

後藤　礼子、あんたよくそうやって冷静に言えるわね。

紅谷　参三、カンニングをゼロにする方法って知ってる？

後藤　えっ？

紅谷　監督官を、教室の前じゃなくて、後ろに座らせるの。それだけのことで、学生たちは、試験の間中、「見られているんじゃないか」っていう思い込みで自分を縛るの。分かる？人間にとって一番強いのは、他人の命令でも強制でもなく、自分で自分に決めたルールなの。

後藤　そういうものなの？

紅谷　そういうものなの。

後藤　だからどうするのよ！

紅谷　だから、粘り強く対処するのよ。

紅谷、後藤に本を渡す。

紅谷　取り敢えず、この本でも読んでなさい。

後藤　何？

紅谷　『南北朝の歴史』。彼が言ってることが書いてあるわ。話を合わせられるでしょう？

後藤　えっ、じゃあ、ほんとの事なの？

紅谷　患者の妄想を決して否定しないこと。うんうんと聞いてあげること。いいわね。

後藤　ええ。

紅谷　（本を開けて）ここなんか喜ぶわよ。「大逆事件の法廷で裁判長に天皇を殺害しようとするなど天も人も許さざる大罪なるぞっと決めつけられた幸徳秋水（こうとくしゅうすい）が『今の天皇は南朝の天子を殺して三種の神器を奪い取った北朝の子孫ではないか。それを殺すのが何故それほどの大罪か』と言い放ち、裁判長は黙り込み、法廷は大混乱におちいった『、ね。

後藤　ほお。

紅谷　でも、意識を取り戻したら、すぐに連絡すること。私も陛下と話したいからね。分かった？

後藤　え、ええ。……礼子、

紅谷　何？

後藤　あんた、たくましくなったわね。

紅谷　何言ってるの。これが私の仕事なの。

後藤　今度、素敵なショウパブ紹介したげる。みんな、キンタマ取ってるのよ。カンガンよ！

紅谷　ありがと。

紅谷、去る。

（ベッドが出てくる）

9

病室。
寝ている立原。
参三、側に行き、本を読み始める。
ううんとうめく立原。
はっと立原を見る後藤。
意識を取り戻す立原。

後藤　陛下、おめざめになりましたか。
立原　……周、いい案は浮かびましたか？
後藤　いえ、それがまだ。……警察にうむを言わせない証拠というものがあればいいのですが。なにかありませんか、証拠は？
立原　天皇の証拠は、三種の神器だけです。
後藤　作っちゃいますか？
立原　……周は時々、面白い冗談を言いますね。
後藤　ありがとうございます。
立原　いい案がないのなら、直接、行くしかありませんね。

と、立原、動こうとする。

後藤　いえ、陛下、勉強です！勉強のために、もう少し、お時間を下さりました。
立原　なんですって？
後藤　陛下が皇居にお行かれになられる時に、私もマスコミからお聞かれになるとお思いになりました。その時、私が南朝の正当性について全くお答えになられないとしたら、なんとしてございましょう。
立原　周、使い慣れない敬語は、使わなくていいです。
後藤　はい。あの、私、今、本を読んでいらっしゃいます。この本です。足利義満なんて全然知りませんでした。私、聞かれますよ。「あなたは南朝をどう思うんですか？」って。そんな時に、「は

っ？なんて言ったんですか？私、耳が遠くて。なにせ、私、難聴なもので」なんてボケかましたら、マスコミや警察になんて思われるでございましょう。私のボケは陛下のボケ、私はもう、不憫で不憫で、勉強さえ、勉強さえしていたら……

立原　分かったから。落ち着きなさい。

後藤　すみません。陛下。私の勉強が終わるまで、もうしばらくここでお待ち下さい。

間。

後藤、枕元のブザーのスイッチをを何気なさそうに押す。

立原　周はどうして宦官になったのですか？やはり、出世のためですか？

後藤　いいえ。

立原　では、どうしてですか？捕虜になったのですか？

後藤　いいえ。……陛下、私は作家になりとうございました。

立原　作家……

後藤　ところが、私には、書くべきことがなかったのです。どう考えても、書くべきことがなかったのです。

立原　で、哀しみのあまり、宦官になったのですか？

後藤　いえ、陛下。私は私が空っぽだから書くことがないんだと思いました。

立原　で、哀しみのあまり、宦官になったのですか？

後藤　いえ、陛下。私はさまざまなことをしました。面白い体験をするためです。ですが、何をしても、私は一杯にならないのです。

立原　で、哀しみのあまり、

後藤　いえ、陛下。私は私を変えたかったのです。こうなることは、私にとって最大の冒険であり、必然だったのです。

立原　冒険であり必然ですか。

後藤　はい。やっと本当の自分と出会えたのです。

立原　本当の自分……それはいいものですか？

後藤　はい。

間。

後藤　陛下、何かお食べになりますか？リンゴでもすりましょうか？

立原　ああ、もらいましょうか。

後藤、リンゴを取り出し、手で二つに割る。

そして、すり始める。

立原　私は時々、思うのですよ。天皇などに生まれず、平凡な一人の男として生まれていたら、どんな人生を送っていたのかと。

後藤　はい。

立原　あまりに思いが強いのでしょう。時々、夢を見ます。夢の中では、私は平凡な一人の男なのです。なにか平凡な文章を書いて生活している平凡な男なのです。

後藤　そうですか……

10

紅谷が入ってくる。

紅谷　こんにちは。調子はどうですか？

立原、紅谷を見る。

紅谷　あら、リンゴをすってるの？おいしそう。

立原　失礼ですが、あなたは？

紅谷　始めまして。私は紅谷礼子と言います。

後藤　お医者さまです、陛下。

立原　はて。警察の目をごまかすために入院しているのではないのか。どうして、御典医がいるのです？

後藤　いえ、それは……

紅谷　人間ドックみたいなものです。このさい、体のあちこちを点検してみようと、彼が気をきかせたんです。

立原　周、ただちにここを出ます。

二人　えっ？

立原　うかつですよ、周。この者が北朝に通じてないとどうして分かるのです。

後藤　陛下、

立原　薬と称して、毒を盛ることぐらい、医者なら簡単にできます。

後藤　陛下、あの、……紅谷先生もカンガンなのです！

紅谷　えっ？

後藤　一緒にキンタマ取った同期なんです。だから信用できます。痛かったよなあ、あの時！

紅谷　あのね、

後藤　なんかカンガンくさいでしょう。ニューハーフ入ったカンガンなんです。

立原　周、もし一度でも私に嘘をついたら、それまでですよ。

後藤　もちろんです。陛下、私の目を見て下さい。この目が嘘をついている目ですか？

立原　（目をじっと見て）……そうですか。（紅谷に）あなたもいろいろあったのですね？

紅谷　私は宦官ではありません。周さんは嘘をついています。

後藤　（腰が砕ける）

紅谷　ですが、私は北朝でも南朝でもありません。

立原　なんですって？

紅谷　私は医者です。医者は、敵味方は関係ありません。ただ、陛下により健康になって皇居に行っていただきたいと思うだけです。

立原　……。

紅谷　陛下、私を信用していただけませんか。医者は、陛下の食事から、毒を見つけ出すこともできるのです。

後藤　（立原の口真似で）よろしい、信用しましょう。

立原　周、それは私のセリフです。

後藤　すみません。私、つい、人の立場に割り込んじゃうクセがあるもので。

紅谷　信用して下さい。お願いします。

立原　……分かりました。信用しましょう。

後藤　やったあー！これで、一件落着ね。

立原　……周は嘘をつきましたね。

後藤　陛下、何をおっしゃるんですか。紅谷先生は、敵も味方もない赤十字のようなお方だと言いたかったんですよ。赤十字といえば、ナイチンゲールでしょう。ほら、ナイ、チン、ガール。チンチンがないんだから（突然）すみませんでした。もう、嘘は言いません。

紅谷　陛下のことを思って、どうしようもなく言ってしまったんです。許していただけませんか？

立原　周、一度だけですよ。二度目はありません。

後藤　へへーっ（とひれ伏す）

紅谷　それでは陛下、御気分はいかがですか？

立原　快調快調、快調は社長の上だけど天皇の下。

二人　は？

立原　と、言いたい所ですが、少し頭が重いですね。

後藤　陛下、ジョークですね。なんだ、陛下もジョークをおっしゃるんじゃないですか。

立原　周。

後藤　はい。

立原　（強く）女官達はみんな笑ったぞ。

後藤　えっ？

立原　……少し頭が痛くなってきました。

紅谷、無理して突然に笑い出す。

笑いながら、マジな目で、後藤に、「あんたも笑うのよ」と指示する。

後藤、なんとか笑い出す。

立原　薬が悪いんじゃないだろうか。
二人　えっ？
立原　だから、クスリとも笑わない。

紅谷、後藤、無理して笑う。

立原　ずーっとベッドで寝ていたから、汗でベッドベッド。

紅谷、後藤、無理して笑う。

立原　枕がなくなったら、お先真っ暗。
後藤　はい、陛下。

後藤、笑いながら、すったリンゴをスプーンでねじ込む。
立原、口をもぐもぐと動かし、

立原　すったリンゴを食べるとドキドキするな。
後藤　は？
紅谷　スリリンゴ（グ）。
後藤　あはっはっはっ。（笑う）
立原　（厳粛に）何人（なんぴと）たりとも、私より先にオチを言うことは許されない。
紅谷　失礼しました。陛下。
立原　本当に美味しい。
後藤　はい、陛下。
立原　これが病室ではなく、皇居ならもっと美味しいでしょうに……
後藤　あっはっはっはっ。（笑う）
立原　（きつく）周、これはジョークではないぞ。
後藤　失礼しました、陛下。

後藤、また、立原の口にスプーンを近づける。

立原　周、悪いがまた眠くなった。眠くて眠くてたまらぬ。

後藤、ちらと紅谷を見る。

紅谷、うなづく。

後藤　どうぞ、おやすみ下さい。

立原　リンゴの続きは、皇居で食うぞ。

後藤　はい、陛下。

立原　リンゴはコウギョクにしてくれ。皇居でコウギョクを食う。……ちと苦しいか。

無理して笑う紅谷と後藤。

眠りに入る立原。

後藤の笑い、そのまま泣き顔になる。

見つめ合う紅谷と後藤。

光が落ちる。

11

紅谷が浮かび上がる。

紅谷　それから彼はまた眠り続けました。精神安定剤と睡眠薬の交互の使用がこの結果を生んだのですが、仕方ないと思っています。皇居へ行きたいという彼の願いは依然として強く、混乱が起こる可能性があったからです。

一般に、狂ってしまえばそこには平安があると思われていますが、それは大きな誤解です。人は妄想を選んでも、その中で苦しんでいます。ひょっとしたらそれは、妄想を持つ以前より激しいと言うことができます。

彼が激しく皇居にこだわるのは、自分の選んだ妄想に、彼自身が不安だという証拠だと考えられるのです。

そうして、二週間が過ぎました。陛下とは、二度話すことができ

ました。彼とはまだ話せてはいません。

後藤、入ってくる。

後藤　礼子。

そこは診察室。

紅谷、驚く。

紅谷　何、参三。

後藤　まだ起きてるの？

紅谷　参三だって。

後藤　眠れなくてね。

紅谷　私は仕事よ。

後藤　ちょっといい？

紅谷　どうしたの？

後藤　ううん。なんとなくね。コーヒー、いれようか？

紅谷　ありがと。

後藤、コーヒーを入れ始める。

後藤　いつまで続くんだろ。

紅谷　さあねえ、来週か十年先か、でもきっとなんとかなるわよ。

後藤　でも、このまま雅人に戻らなくて、ずっと陛下のままだったらどうしよう。

紅谷　そしたら、参三もずっと宦官のままね。

後藤　こんな時に、よくそういうことが言えるわね。

紅谷　陛下のジョークよりはましでしょう？

後藤　そうよねえ……ねえ、礼子、苦しいことはしゃべった方が気が楽になるのよ。

紅谷　えっ？なんの事？

後藤　あたしさ、病院のアイドルになっちゃって。

紅谷　えっ？

後藤　いろんな話が入ってくるのよ。

紅谷　（さっと顔を曇らせて）ただの噂話よ。

後藤　あんた、昔から人の悪口とか噂話とか絶対にしなかったもんね。そういう人は大嫌いだったし。

紅谷　そうかな。

後藤　噂話って不思議よね。面と向かって言われたらそうでもないのに、噂で聞くと物凄く傷つくの。どうしてだろ？

紅谷　たぶん、想像力が入ってくるからよ。

後藤　そうね。噂話って、どんどん大きくなるもんね。

紅谷　違うよ。私の噂を聞く時の、私の想像力よ。

後藤　えっ？

紅谷　私の想像力が、私の噂を完璧にするのよ。

後藤　そういうものなの？でもね、たまには言わないと体に毒よ。

紅谷　私は言う方が体に毒なの。

後藤　あの人達みたいに、いつでもどこでも誰にでもしゃべるからだめなのよ。

紅谷　じゃあ、どうするの？

後藤　あら、あんた精神科医のくせにバカね。ふだん、なんのために人の相談にのってるのよ。

紅谷　精神科医のくせにって言い方、やめてくんない。それとこれとは、関係ないでしょう。

後藤　あるわよ。人の相談ばっかりのってるとね、自分の相談ができなくなるのよ。

紅谷　あたしはいいのよ。

後藤　生きていくためにはね、聞いてあげるっていう人の前でこっそり言うのよ。

参三、目を背けたまま、「話しなさいよ」という手のアクション。

間。

紅谷　……たぶん、噂話の通りよ。
後藤　えっ！あんた、マントヒヒとつきあってるの！？
紅谷　どんな噂よ！
後藤　ほら。自分の口で言うの。
紅谷　だから、あのさ、あれよ、ほら、なんていうか、つまりその、早い話が、
後藤　早くないわよ。あんたって、本当に精神科医のくせに、
紅谷　不倫、どんづまり、以上。
後藤　早すぎるわよ。
紅谷　好きになった相手にたまたま妻子がいたの。これを世間じゃ、不倫て言うんでしょう。
後藤　（紅谷の口調を真似して）「世間じゃ不倫て言うんでしょう」……照れてるの？かわいい。
紅谷　精神科医をからかうんじゃないの。
後藤　（医者らしく）なるほど。そうですか。で、相手は何て言ってるんですか？
紅谷　何よ、その言い方。
後藤　えっ……ごめん。医者は礼子だったわね。で、どうなのよ？
紅谷　別に。
後藤　別にって、何よ。
紅谷　別には、別によ。
後藤　女房と別れないって？
紅谷　妻が泣くんだって。子供がすがるんだって。ほんとかねえ。
後藤　いいじゃない、いいじゃない。調子出てきたじゃない。
紅谷　あんた、うまいわねえ。
後藤　あたしはスーパーかまカウンセラーのしゅわ子って、お店じゃ言われてたのよ。今まで、どれだけの人間を立ち直らせ、地獄に突き落としてきたと思ってるの？ね、どんな人よ？
紅谷　噂話の通りよ。
後藤　えー、やっぱり、マントヒヒなの！
紅谷　分かったわよ。この病院の医者よ。
後藤　えーっ、どの人どの人？

紅谷　白々しい。見てきたんでしょう。私がこの病院に研修医で来た時からのつきあいよ。

後藤　えー、じゃあ、細面（ほそおもて）のすらーっとしたあの人かなあ！？よーし、明日、サイン貰いに行こっと！

紅谷　参三！

後藤　冗談よ、冗談。……ほら、すーっとしたでしょう。

紅谷、少し微笑む。

紅谷　参三、あんた尽くすの？

後藤　任してよ。あたしなんか、尽くして尽くして、尽くし殺すわよ。

紅谷　なによ、尽くし殺すって？

後藤　だから、なんでもしてあげるうちにどんどんダメな男になって、結果的に飽きて捨てるのよ。

紅谷　いいわねえ。しゅわ子は迷いがなくて。

後藤　あら、何その言い方、バカにしてる？

紅谷　コーヒー、お代わりする？

後藤　バカねえ。こういう時は、お酒よ。ないの？

紅谷　ウィスキーが少し。

後藤　それよ、それ。あるんなら、出しなさいよ。さ、なれそめから聞こうじゃないの。

紅谷　参三もさ、男性との初体験の話、してくんない？

後藤　だめよ。子供には刺激が強すぎるわ。

紅谷　けちー！いいじゃん、いいじゃん！

後藤　あんた、人生観、変わってもいいの？

紅谷　してよー！してよー！

後藤　ちょっと、他の人が見たら、誤解するじゃないの。はしたない。

紅谷　してよー！してよー！

後藤　いいけど、あんた、腰抜かすわよ。

紅谷　わお！

後藤　さ、酒じゃ、酒じゃ。

紅谷　酒じゃ、酒じゃ！

見つめ合い、微笑む二人。
そのまま、溶暗。

12

笑い声。
明かりつく。
立原の病室。
ベッドに立原。
引きつりながら笑っている紅谷と後藤。苦しそう。

後藤　本当に陛下はジョークがお上手なんですから。
立原　そうか。じゃあ、これはどうだ。私がつい、おぷうをしてしまってな。そしたら、側にいた女官が、「あら、陛下が」
紅谷　（時計を見て）あら、もうこんな時間。また、来ますね。
立原　先生、オチを聞いていただかないと、この話は面白くありませんよ。
紅谷　ええ、今度、ゆっくり。じゃ、（後藤に）何かあったら呼んで下さいね。

紅谷、部屋を出ようとする。
後藤、さっと歩み寄って、立原に聞かれないように、小声で、

後藤　逃げるの？
紅谷　何？
後藤　一緒に笑ってよ。
紅谷　いいですか、患者の発言は決して否定してはいけませんよ。
後藤　つまんないギャグも否定しちゃいけないの？
紅谷　もちろんです。
後藤　お店だったら、ビール瓶で頭割ってるわよ。

紅谷　ここはお店じゃないでしょう。
後藤　つまんないギャグがどんどん増えてるのよ。なんか、悪い病気じゃないの？
紅谷　……。
立原　先生、オチを聞きたいですか？
紅谷　ええ、今度、ぜひ。では。

紅谷、去る。

立原　ふう。臣民をもてなすのも、骨が折れるの。
後藤　（驚愕して）もてなしだったんですか！

立原、さっと顔を変えて、

立原　周、何かいい案は浮かんだか？
後藤　……いえ、陛下、申し訳ないのですが、まだです。
立原　私は名案が浮かんだぞ。
後藤　は、それは？
立原　自衛隊に会いに行こう。
後藤　えっ？
立原　直接、皇居へ行こうとしたからまずかったのだ。自衛隊に行き、話をしよう。きっと分かってくれる人間がいるはずだ。
後藤　陛下、それは……、
立原　周、安心しろ。何も直接行こうというわけじゃない。
後藤　（ほっとして）はい、陛下。
立原　天皇に親しいマスコミを通じて、自衛隊幹部と密かに会おう。周、ただちに、『サンケイ新聞』か『週刊新潮』記者を呼びなさい。彼らは、天皇の下僕（げぼく）です。
後藤　はい、陛下……。

後藤、うろたえている。

立原　何をしています！早く連絡しなさい！
後藤　はあ……
立原　周、怒りますよ！
後藤　はい……
立原　いいです、私が行きます。

立原、ベッドから降りようとする。

後藤　陛下！

後藤、立原を止めようとする。
二人揉み合い、立原、バタンと床に倒れる。

立原　陛下、大丈夫ですか！

後藤、立原を抱えてベッドに戻す。

後藤　陛下、分かりました。さっそく、電話してきます。
立原　……待て。
後藤　えっ？
立原　待て、参三。

後藤、驚きのあまり、息を飲む。
立原、上半身をベッドから起こし、

立原　参三、ここはどこだ？

後藤、ベッドに駆け寄り、ブザーのスイッチを押す。

後藤　礼子！礼子先生！早く！早く！

ブザーの音が響く。

紅谷、飛び出てくる。

後藤　礼子！雅人が、雅人が、

紅谷、すっと医者の顔になって、手で後藤を制し、

紅谷　気分はどうですか？

立原　あ、いや、……（後藤を見て）どうしてそんなに興奮してるんだ？

後藤　何言ってるのよ。やっと雅人に戻ったんだもん。嬉しくて、

立原　戻った？

後藤　あ、いえ……（口ごもる）

紅谷　頭は痛くないですか？

立原　戻ったってどういう意味だ？

後藤　だから、あの……

立原　参三！

紅谷、後藤を見て、

紅谷　参三、ちょっと席を外してくれない。

後藤　えっ？

紅谷　ここは主治医にまかして。

後藤　あの……

紅谷　大丈夫よ。

後藤、病室から出て行く。

立原　僕はここに来て、どれぐらいだ？

紅谷　二週間とちょっと。

立原　（真剣に）僕はもう一人の僕になっていたんだね。

紅谷　……。（立原の顔を見つめる）

立原　もう一人の僕から今の僕に戻ったから、参三は興奮していたんだ

ね。

紅谷　……。

立原　もう一人の僕は何を考えていた？

紅谷　……。

立原　もう一人の僕は何をしたがっていた？それが本当の僕がしたいことなんだ。教えてくれ、礼子、本当の僕は何がしたいんだ？

紅谷　……知ってどうするの？

立原　決まってるだろう。それを知れば、僕の離人症は治るんだ。いや、僕の人生そのものをやり直すことができるんだ。

間。

紅谷　もう一人のあなたは、平凡な男になりたがっていたわ。

立原　えっ……、どういう意味だ？

紅谷　そのままよ。平凡な男になって、平凡な文章を書いて生きてみたいって言ってたわ。

立原　……嘘をつくのか？

紅谷　医者が患者に嘘をついてどうするの。もう一人のあなたは、そう言ったのよ。

立原　（微笑み）……夢を見ているみたいだ。

紅谷　えっ？

立原　君とこうして喋っているなんてとても信じられない。まるで、夢みたいだ。

紅谷　頭、痛い？

立原　先生、周はどこです？

紅谷　！

立原　周に用事があるんです。呼んでいただけませんか？

紅谷　（少しうろたえて）今、トイレに行ってますから。すぐに、戻って来ると思いますよ。

立原　そうですか。……どうしました？

紅谷　えっ？

立原　とても悲しい顔をなさっていますね。

紅谷　そんなことはないですよ。
立原　本当のことを言いませんか？
紅谷　えっ？
立原　昨晩、少し、散歩をしました。周を起こすのは、忍びなかったもので。……ここは精神科の病院なのでしょう。
紅谷　陛下、あのですね、
立原　一体、誰が患者なのですか？
紅谷　誰も患者ではありません。陛下は、警察の目を逃れるために、入院しているだけです。
立原　私は皇居へ行けるのでしょうか。
紅谷　行けると思いますよ。
立原　では、今から行きましょう。
紅谷　えっ、
立原　警察も女性と二人なら、手は出せないでしょう。
紅谷　どうしてです？
立原　申し訳ないのですが、いざとなったら、人質になっていただけませんか？いえ、もちろん、演技で結構なんです。さ、行きましょう。

立原、ベッドが起き上がる。
紅谷、枕元のブザーを素早く、二回、押す。

立原　何をしました？
紅谷　いえ、何も。
立原　どうして嘘をつくのです。何をしました！？

立原、紅谷に迫り、そのまま、ベッドに押し倒す格好になる。

紅谷　陛下！

立原、紅谷の胸ぐらをつかんで、激しく揺する。

立原　何をしたんです！？どうして、嘘をつくんです！どうして嘘を！？

紅谷の口を押さえ、そのまま、紅谷の首を絞め始める立原。

激しく抵抗する紅谷。

紅谷　（声にならない声）

立原　どうして、どうして邪魔するんです！私は皇居へ行かなければならないんです！

紅谷の手が、立原の手を払おうともがく。

そのまま、立原の顔を平手で叩く。

ひるんだ一瞬、立原をかろうじて突き飛ばす。

ベッドから飛び退く紅谷。

立原、紅谷に飛び掛かろうとする。

紅谷　（祈るように）雅人！

立原、はっとする。

立原　……礼子。

紅谷、その場にへたり込む。

紅谷　……雅人。

足音が聞こえる。

紅谷、立ち上がり、音のする方に、

紅谷　（毅然と）なんでもありません。患者さんが間違えて押しただけ

です。はい、ご迷惑をおかけしました。

振り返り、あたらめて、立原を見る。

呆然としている立原。

紅谷　（力なく微笑んで）お帰りなさい。……遅かったわよ。

立原　あの……僕、なんか、とんでもないことを礼子にした？

紅谷　大丈夫、大丈夫。

後藤、飛び込んで来る。

状況を見て、一瞬で誤解する。

後藤　いやあー！ひどい、ひどいわ！

その声に驚く二人。

紅谷　あのね、参三、

後藤　おだまり！乱れているベッド、呼吸の上がった二人、ほんのりとした汗の匂い。ああ、何度、同じ現場に出くわしたことか。「ただいま。あら、お客さん？（声色を変えて）や、やあ。友達。今話してたとこなんだ」話して汗かくわけないじゃないの！あんたは腹筋しながら話すのか！嘘つきー！こんこん、ガチャ。あれ？「や、やあ。彼が急に気分悪くなったっていうから、吐かせてたんだ」あんたはズボン脱いで吐かせるのか！嘘つきー！ああ、あたしの人生はなんだったの？いっつもそう。いっつも、奪われていく人生。神よ。私の声が聞こえますか？私はどうしたらいいのですか？（声色を変えて）「かわいそうな小羊、しゅわ子よ。許すのです。許すことしか道はないのです。」はい、神さま、これは試練ですね。（二人に）浮気なら許すわ。

紅谷　何言ってるの。誤解よ。

後藤　じゃあ、このベッドの状態はなによ！？

紅谷　雅人、気分はどう？

立原　なんだか、頭が痛い。
紅谷　少し、寝ようか。
後藤　え！？
立原　ああ……

紅谷、立原をベッドにうながす。

立原　でもね、礼子、本当は僕は眠るのが怖いんだ。眠ると、夢から覚めてしまいそうで怖いんだ。
紅谷　どういうこと？
立原　これが夢で、眠ることは起きることなんじゃないかって思えてしょうがないんだ。
紅谷　大丈夫よ、大丈夫。雅人は少しずつ良くなってる。眠れば、もっと良くなるわ。さ、薬よ。

立原、薬を飲む。

立原　礼子、やがて僕がおかしくなっても、君はずっと側にいてくれるかい？
紅谷　おかしくなんかならないって。
後藤　あたしがずっと側にいてあげる。
紅谷　さ、寝ましょう。眠れば、きっと良くなるから。
立原　本当にそうだろうか。本当に……

立原、眠りに入る。
紅谷、全身から力が抜ける。
後藤、ふっと真顔になり、

後藤　何があったの？

後藤を見る紅谷の顔が、泣き笑いになる。
暗転。

13

紅谷に、光が当たる。

紅谷　なにがあったのか、私は参三だけに話しました。正式に報告すれば、鉄格子つきの閉鎖病棟に移動になることは確実だったからです。私の勤めるこの病院は、開放病棟での治療をおこなっています。ですから、閉鎖病棟を持つ病院に転院しなければなりません。そうなれば、参三は付き添えなくなるだけではなく、雅人は私の手からも離れてしまうのです。ただ、その方が参三にとっては良かったのかもしれません。夜中、彼が散歩に出たという事実は、参三から睡眠を奪いました。うとうととまどろんでは、彼が寝ていることを確認し、また眠る。持久戦のような毎日の中で、参三は疲れ切っていきました。それから、五日が過ぎました。陛下とは、三回、話すことができました。目を覚ますたびに、皇居へ行きたいと叫び、私と参三が時間をかせぐという繰り返しでした。これ以上、彼が混乱すれば、私は医者として決断しなければならなくなっていました。

雅人はまだ、帰ってきていません。

後藤の声がする。

後藤　礼子！礼子！

明かり、広がる。

後藤が走り込んで来る。

紅谷　どうしたの！？

後藤　いないのよ！

紅谷　いない！？

後藤　あたしったら、うとうとってしたみたいなの。はっと目を覚まし

たら、いないのよ！
紅谷　他の病室、回ってみて！あたしは、玄関で確認するから。
後藤　ごめんね、ごめんね、礼子！
紅谷　参三が悪いんじゃないよ。さ、急いで！
後藤　うん。

違う方向に走り去る二人。
後藤が飛び込んで来る。
続いて、紅谷。

紅谷　いた！？
後藤　（首を振って）あちこちの病室に顔を出したみたい。さっきまで、八号室にいたらしいわ。
紅谷　玄関は通ってないって。塀をよじ登らない限り、この病院のどこかよ。
後藤　あたし、もう一回、回って来る！
紅谷　あたしも行くわ！

後藤、走り去る。
紅谷も、別な方向に去る。
しばらくして、紅谷が飛び込んで来る。続いて、後藤。

後藤　いた！？
紅谷　ナースステーションに挨拶したって。
後藤　ナースステーション！？
紅谷　あんまり堂々としていたから、誰も疑問に思わなかったんだって。
後藤　もう、陛下、どこに行っちゃったんだろう！全部、探したわよね！

二人、焦る。
紅谷、はっと、

紅谷　あっ。
後藤　なに！？
紅谷　……屋上。
後藤　屋上！？

二人、駆け出す。

14

屋上。
立原、出てくる。
青空に伸びをひとつ。
手すりに近づき、風景を見つめる。
飛び出てくる二人。
後藤、手すりの側にいる立原に走り寄り、後ろからはがい締めにする。

後藤　ダメ！陛下、ダメです！
立原　何をするんですか、周！
後藤　死んじゃダメなんです！
立原　死ぬわけないでしょう！放しなさい！
後藤　ほんとですね、ほんとですね！
立原　当たり前です！放しなさい！

後藤、立原を放す。

立原　一体、どうしたんです？
後藤　どうしたじゃありません！
紅谷　陛下、心配しましたよ。黙って、お部屋を出ないで下さい。
立原　はて、まるで私が患者のような言い方ですね。
紅谷　違います。どこに北朝の人間がいるか、分からないからです。

後藤　そうです！
紅谷　さあ、お部屋に戻りませんか？
立原　もう少し、ここにいてはいけませんか？……私は、屋上にいると、なんだか、とても懐かしい気持ちになるんです。たぶん、私は屋上が大好きなんです。
紅谷　……そうですか。
立原　理由は分からないんですが、なぜだか、失くした何かを見つけられるような気持ちになるんです。おかしいですよね、失くしたものなんか、何もないはずなのに。
後藤　陛下……
紅谷　そういう気持ちは私も分かります。屋上で青空を見つめていると、何故だか、泣き出したい気持ちになります。
立原　よかった。
紅谷　えっ？
立原　分かっていただけて。周、ここでコーヒーでも飲みませんか？
後藤　えっ？
立原　いいでしょう、先生。
紅谷　えっ、でも……
立原　三人で、コーヒーでも飲みませんか？なにもしないのは、この青空と屋上に対して申し訳ない。
後藤　ピクニックですね、陛下！そうですよね、陛下はずっと辛気臭い病室でじっとしてたんですもん。ピクニックしましょう、ピクニック！紅谷先生、いいでしょう？
紅谷　ええ、いいわ。そうしましょう。
後藤　じゃあ、あたし、コーヒー持って来る。あ、それと、クッキーがあったの。待っててね。レッツ・ピクニック！

後藤、走り去る。

紅谷　陛下、これからは、必ず、周さんに声をかけてくださいよ。周さんが、一番、心配しているんですから。
立原　それは、逆です。

紅谷　えっ？

立原　私は周のことが心配なんです。周は疲れ切ってます。周を起こすのはつらすぎます。

紅谷　目が覚めた時、陛下がいないことの方が周さんにはつらいのですよ。

立原　いずれ、そういう時が来るのです。

紅谷　えっ？

立原　周の気持ちはありがたいですが、周は気持ちが強過ぎます。私に対して強過ぎる気持ちを持つ人はよろしくないのです。

紅谷　よろしくない？

立原　私はそういう存在なのです。

紅谷　……どういう意味です？

後藤が、バスケットを持って走って来る。

後藤　お待たー！

後藤、まず、かわゆいビニール・シートを敷き始める。

紅谷　本格的じゃないの！

後藤　陛下の久しぶりの息抜きですからね。どこか行きたいなあと思って、買っといたのよ。さ、座って、座って！

三人、腰を下ろす。

後藤　でも、どうして、屋上ってこんなにワクワクするのかしら？

紅谷　境界線だからかもしれないね。

後藤　境界線？

紅谷　建物の目的から外れた境界線。内部と外部を結ぶ境界線だからかもしれないってこと。

立原　なるほど。

後藤　お客さんがお店に来るのも、仕事と家庭の境界線だからってこと

ね。人間にはそういう場所が必要なのね。
立原　ここが境界線なら、ここから外部に行くには、飛ぶことが一番、簡単ですね。
二人　えっ？
立原　何人ぐらい、ここから飛んだのでしょう。
後藤　陛下、なんてことをおっしゃるんですか。

三人、コーヒーを飲む。
しばしの沈黙。

立原　不思議です。
二人　？
立原　私はなんだか、この風景を見た記憶があります。
二人　え？
立原　おかしいですね。初めてなのに。デジャ・ヴュでしょうか？
後藤　陛下、案外、経験しているかもしれませんよ。例えば高校時代、私達三人、こうやって屋上で売店のコーヒーを飲んだ、なんてのはどうです？
立原　周の冗談は、面白くありませんね。私のようにギャグセンスを磨かないといけませんね。
後藤　（苦々しく）はい、陛下、努力します。
立原　遊びたいですね。
二人　えっ？
立原　なんだか、とてもいい気分です。遊びましょう。
後藤　陛下、遊ぶとおっしゃいましても、どのような……
紅谷　「古今東西有名人」というのはどうです？
後藤　（はっと）あっ！懐かしー！
紅谷　陛下、ルールは、お分かりですか？
立原　聞いたことがありますね。たしか、誰か一人のことを想像して、周りの人が質問しながらその人物を当てるという……
後藤　そうです、陛下。出題者は、周りの質問に、「はい・いいえ」だけで答えるんです。」

立原　不思議です。どうして、私は知っているんでしょう？

紅谷と後藤、顔を見合わせる。

紅谷　じゃあ、私からいきますね。「古今東西有名人・作家」！

後藤　男ですか？

紅谷　いいえ。

立原　生きていますか？

紅谷　いいえ。

後藤　日本人ですか？

紅谷　はい。

立原　昭和の時代に活躍した人ですか？

紅谷　いいえ。

後藤　名前に色が入ってますか？

紅谷　はい。

後藤　紫式部！

紅谷　ピンポン！よく分かったわね。

後藤　だって、礼子、昔と同じ問題よ。

紅谷　えっ、そっか。

立原　昔？なんのことです？

紅谷　いえ、あの、

後藤　いいの、いいの。じゃ、次は私ね。「古今東西有名人・お侍さん」！

紅谷　江戸時代ですか？

後藤　いいえ。

立原　戦国時代ですか？

後藤　はい。

紅谷　武田信玄！

後藤　ぶーっ！

紅谷　伊達政宗！

後藤　ぶーっ！

立原　その人はほととぎすを殺しましたか？

後藤　はい。
二人　織田信長！
後藤　ピンポン！陛下、ナイスな質問です。
紅谷　あんたも昔と同じよ。
立原　じゃ、私ですね。「古今東西有名人・アニメのキャラクター」！
後藤　陛下、意外なとこから来ましたね。
紅谷　陛下、あんまりマニアックなのは分かりませんよ。
立原　大丈夫です。国民誰もが知っているキャラクターです。
後藤　はい！ドラえもん！
立原　ぶーっ。
紅谷　質問が先でしょう。……そのアニメは、ＳＦですか？
立原　いいえ。
後藤　恋愛ものですか？
立原　いいえ。
紅谷　スポーツものですか？
立原　いいえ。
後藤　ギャグですか？
立原　はい。
後藤　サザエさん！
立原　ぶーっ。
紅谷　女性ですか？
立原　いいえ。
後藤　サザエさんの夫のマスオさん！
立原　ぶーっ。
後藤　カツオ！
立原　ぶーっ。
後藤　タラちゃん！
立原　ぶーっ！
後藤　波平！
立原　ぶーっ！
後藤　アナゴさん！
立原　ぶーっ！

後藤　中島！
紅谷　おだまり！あんた、サザエさんから離れなさいよ！
後藤　あたしもあんまり、ぶーぶー言われて悲しい気持ちになってたとこなの。
立原　第一ヒント。そのキャラクターは、「女好き」です。
紅谷　「女好き」？
後藤　はい！のび太！
立原　ぶーっ！
紅谷　主役ですか？
立原　はい。
後藤　えー、ギャグで男で主役で女好き……
紅谷　分かった！ルパン三世！
後藤　ああ、私が当てたかったのに！
立原　ぶーっ。
二人　ええ！
立原　第二ヒント。そのキャラクターには、仲間がたくさんいます。
後藤　だから、ルパン三世でしょう！
紅谷　そのキャラクターは、大人ですか？
立原　鋭い。いいえ。
二人　大人じゃない！？
紅谷　子供ですか？
立原　はい。
後藤　分かった！忍たま乱太郎！
立原　ぶーっ！
後藤　分かった！パタリロ！
立原　ぶっー！
後藤　分かった！コナン！
立原　ぶーっ！
後藤　分かった！ケロロ軍曹！
立原　ぶーっ！
後藤　分かった！あさりちゃん！
立原　ぶーっ！

後藤　分かった！ポプ子！
立原　ぶーっ！
後藤　分かった！ピピ美！
立原　ぶーっ！
紅谷　全然分かってない！
後藤　分かった！そんな奴はいない！
立原　ぶーっ！……降参ですか？
紅谷　待ってください。陛下。第三ヒントを。
立原　第三ヒント。そのキャラクターは、お尻を出すのが好きです。
紅谷　お尻を出すのが好き？
後藤　相撲取り？相撲取りの子供のギャグマンガなんてあった！？
紅谷　分かった！クレヨンしんちゃん！
立原　ピンポン正解！
紅谷　やったー！
後藤　くやしいー！
立原　紅谷先生には、勲一等旭日菊花大授賞をさしあげます。
紅谷　ありがとうございます。

ふっとなごむ三人。
立原、立ち上がり、手すりに歩み寄る。
風景を見ようとしているのだ。
後藤が下を向いている。

紅谷　どうしたの？
後藤　ううん。なんでもない。
紅谷　何、泣いてんのよ。
後藤　（立原の後ろ姿を見ながら）また、屋上にいるなんて夢みたいね。
紅谷　えっ？
後藤　三人そろって屋上にいるなんて、夢みたい。
紅谷　……そうね。
後藤　このまま、授業に戻りそうになるわ。

紅谷　うん。
後藤　もっと早く会えばよかったね。
紅谷　何言ってるの。参三が決めたんでしょう。冗談だと思ったのよ。でも何回連絡しても本当に会わないんだから。
後藤　ごめん。
紅谷　いいのよ。こうやってまた、会えたんだから。そういう意味じゃ、雅人に感謝しないと。
後藤　雅人の妄想に感謝ね。
紅谷　えっ、まあね。

立原、振り向き、

立原　周、サンケイ新聞から何かありましたか？
後藤　いえ、あの、
紅谷　連絡はありました。
後藤　えっ？
立原　そうですか。それで、いつ会うことになりましたか？
紅谷　その前に、記者が言うにはですね、陛下が皇居へ行かれて何をするのか知りたいと申しておりました。
立原　なるほど。その方に伝えて下さい。私の願いは、南朝の正当性を知らせるだけです。その願いがかなえば、私は天皇としてなにもしません。
後藤　陛下、何もしないのなら、今と同じではありませんか。だったら、
立原　そうではない、周。天皇である私は何かをしてはいけないのだ。何もせず、何者でもない存在が天皇なのだ。
後藤　では、陛下は一体、なんなんです？
立原　私は、空（くう）である。
後藤　空？
立原　生ビールを飲んで、オヤジが出す声ではないぞ。
後藤　は？
立原　……忘れなさい。空と書いて空（くう）と読む。それが私の願い

です。先生、その記者にそうお伝え下さい。

紅谷　分かりました。

立原　戻りましょう。眠くなりました。……今日はとても疲れました。

二人　……。

立原、去る。

後藤、医者が注意深く人にたずねるように、

後藤　今の話を聞いて、どう思った？

紅谷　……。

後藤　礼子はどう思ったの？

紅谷　参三、私が医者なの。医者の私にまかせて。

後藤　ごめんね。私、つい、人の立場に割り込んじゃうクセがあるから。

紅谷　私が医者なの。

明かり、落ちる。

15

紅谷の電話の声が聞こえる。

明かりつく。

電話をしている紅谷。

紅谷　そうですか。ベッドの空きはありますか。いえ、そういうんじゃないんです。ただ、念のために確認しておこうと思いまして。市川先生なら、なにかとご相談にのっていただけるんじゃないかと思いまして。ええ、またなにかありましたら、ご連絡させていただきます。

後藤が入って来る。

さっと電話を置く紅谷。

後藤　礼子。
紅谷　あら、参三。……陛下は？
後藤　看護師さんに見てもらってる。よく寝てるから。
紅谷　そう。うまく息抜きしないとね。
後藤　あんたもよ。最近、どんどん顔色悪くなってるわよ。
紅谷　あたしは大丈夫よ。これが仕事なんだから。
後藤　ねえ、礼子。正常と異常って、どこで見分けるの？
紅谷　えっ？
後藤　どこまでが普通で、どこまでが狂ってるの？
紅谷　どうしたの？本気で看護師、目指すの？スーパーカウンセラーの方がいいんじゃないの？
後藤　真面目に教えて。
紅谷　統合失調症の原因がはっきりとは分かってないって、以前言ったよね。覚えてる？
後藤　うん。
紅谷　つまり、脳自体としては、いくら調べても、異常は発見できないの、現代の医学ではね。
後藤　うん。
紅谷　私達は神様じゃないんだから、どこまでが正常でどこからがおかしいなんて決定できないのね。
後藤　じゃあ、何も分からないじゃない。
紅谷　だから、別の基準を作ってるの。
後藤　何？
紅谷　その人が社会生活を送れるかどうか。例えば「脅迫神経症」というのがあるのね。何を触っても、手が汚れると思い込んだ人がいて、何かを触ると、一時間は手を洗ってるの。これだと、就職もできないし、学校にも行けないでしょう。だけど、カウンセリングと薬を飲むことで、５分間ですむようになったら、私達はその人は正常になったと判断するの。
後藤　五分間、ずっと手を洗ってても？
紅谷　そう。五分間なら、社会生活はなんとかやっていけるでしょう。

後藤　雅人の場合は？
紅谷　サラリーマンをしながら、自分は宇宙人であるって本気で思っている人って結構いると思うのね。でも、その人が他人に迷惑もかけず、仕事もちゃんとやってたら、問題はないの。逆に、そういう人を問題にしちゃ、いけないと思うの。……雅人の場合は、皇居へ行きたいという願いさえ消えれば、問題はずんぶん、減ると思うわ。でも、どうして？
後藤　……退院させようかと思ってるの。
紅谷　（驚いて）退院！？
後藤　だめかなあ……
紅谷　だめって……どうしてよ？
後藤　だって、
紅谷　だって、何よ。
後藤　怒らない？
紅谷　何？
後藤　怒らないなら言う。
紅谷　怒らないから言いなさいよ。
後藤　絶対？
紅谷　絶対よ。
後藤　約束よ。
紅谷　早く言いなさいよ。
後藤　だって、だって、ここんとこ、雅人と礼子って、ラブラブって感じなんだもん。
紅谷　はあ！？
後藤　雅人はさ、ま、陛下だけど、先生、先生って言うしさ、あんたも妙に熱心だし、
紅谷　参三！
後藤　ほら、怒った。
紅谷　怒ってないわよ。呆れてるのよ。
後藤　どうしてよ？
紅谷　どうしてって、あのね、参三、私は仕事なの。
後藤　そんなの関係ないわよ。仕事ですむんなら、職場恋愛なんか起こ

るわけないじゃない。先生と生徒、医者と患者、出家とその弟子。パターンじゃないの。それにさ、みんなもさ、紅谷先生は妙に熱心だって言うしさ、

紅谷　みんなって誰よ？

後藤　みんなは、みんなよ。それにさ、

紅谷　なによ。

後藤　あんた、苦しい恋愛してるしさ、ふらっとさ、

紅谷　参三！

後藤　怒った。

紅谷　怒るわよ。当たり前でしょう。あんた、そんな目で私を見てたの？

後藤　だって、雅人はあんたにしか言わないんだもん。あたしには、「周、いい案は浮かびましたか？」これぱっかりなんだもん。あたしだって、あの人のグチ聞きたいんだもん！あの人の弱音聞きたいんだもん！なのに、あの人は、全部、あんたにしか言わないんだもん！

間。

紅谷　参三……

後藤　パターンよ、パターン。友情が恋愛になったって言う、ジュニア文庫お得意のパターンよ。だけど、しょうがないじゃない！

紅谷　……。

後藤　薬飲んで寝てるだけなら、彼の家でも充分でしょう。

紅谷　何言ってるの。彼の妄想がこれからどうなるか分からないのよ。

後藤　時々、連れて来るわよ。

紅谷　無茶言わないで。もし、彼が暴れたらどうするのよ。

後藤　私なら充分でしょう。

紅谷　あなたは本当の錯乱状態を知らないからよ。細身の女性が信じられない力を出すのよ。

後藤　そしたら私も信じられない力を出すわ！

間。

紅谷　参三、疲れてるのよ。一度、家に帰ってゆっくり寝てくればいいわ。その間ぐらい、こっちでなんとかするから。

後藤　礼子、あんた、あたしがどれだけ恋愛体質か想像できないでしょう。

紅谷　参三。

後藤　あたしなんか、自分で嫌になるぐらい乙女なのよ。こんなにボーイッシュなのに、乙女臭いぐらい乙女なのよ。あんたたなんか仕事臭いぐらい仕事でしょう。

紅谷　あのね、

後藤　あんたなんか、彼と同じベッドで寝てて、「ああ、このまま溶けちゃったらいいのに」って、全身の力抜いて、おならしたことなんかないんでしょう。

紅谷　参三。

後藤　腕枕してもらって、汗かいた脇の匂いがぷーんと鼻を直撃しても、嬉しくて嬉しくて深呼吸して、吐きそうになったことなんかないんでしょう。

紅谷　参三、あのね、

後藤　あんたなんか、溶けちゃいたいなんて相手が言ったら、「そういえば、チビクロサンボは一度発売禁止になりましたね。虎が溶けてバターになるなんてありえませんよね」なんて思ってるんでしょう。

紅谷　いいかげんにしなさい。

後藤　脇の匂いがぷーんと来たら、腕枕はずして、「しびれてきた？」なんてごまかす小賢しい女なのよ！

紅谷　怒るわよ、参三。

後藤　だからあたしのつらさが分からないのよ！

間。

紅谷　医者として、今の時点では、退院は許可できません。

後藤、急に弱々しく、

後藤　……礼子、あたしはどうしたらいいの？

紅谷　参三……

後藤　天皇のままじゃいけないの？あたし、天皇の雅人でいいの。もう決めたの。天皇の雅人でいいの。

紅谷　参三、彼は今、統合失調性の妄想を呈している。でも、このまま、妄想が膨らむか、精神崩壊に向かうか、まだ分からないのよ。

後藤　あんたはいつもそうやって、冷静に分析するのね。

紅谷　えっ？

後藤　（なじるように）分析したって、変わらないじゃないの。

紅谷　（感情が溢れ出て）分析するしかないじゃない！粘り強く相手を分析して、自分を強くするしかないじゃない！答えなんて簡単に転がってないのよ！そんなに簡単に答えが欲しいんなら、どっかの新興宗教にでも行けばいいじゃない！先祖が水子か家か悪霊か、すぐに答えを教えてくれるわよ！ここは病院なのよ。監獄でも神社でもないの。そして、私は医者なの。あんたに何が分かるって言うのよ。あんたなんか、ただおろおろしてるだけじゃない！おろおろして、あんたの不安を私に押しつけてるだけじゃない！私の不安なんて考えたこともないんでしょう！あんたに何が分かるって言うのよ！

後藤　……礼子。

間。

紅谷　……ごめん、言い過ぎた。

後藤　（優しく）すっとした？

紅谷　えっ？

後藤　賢い大人はね、こうやって時々、励まし合うの。

微笑む後藤。
それに応えて、苦泣笑する紅谷。

紅谷　……あんまりしたくないわ。
後藤　ずいぶんね。これが、スーパーカマカウンセラーの知恵なのよ。
紅谷　参三、あたしね、妊娠してるの。
後藤　あら。
紅谷　どうしていいのか、分からないのよ。
後藤　……あいつはなんて言ってるの？
紅谷　おろせって。おろしたらたぶん、別れるって言うんじゃないかな。
後藤　なるほど。
紅谷　子供ができて、初めて事の重大さに気づいたってやつ。
後藤　殴っちゃおうか？
紅谷　えっ？
後藤　そんな奴、殴っちゃおう。
紅谷　うん。
後藤　よおし、かわいい礼子をいじめるなんて、ひどい奴だ。ぼこっ。

後藤、何もない空間に向かって、殴り真似をし、にこっと紅谷を誘う。
紅谷、微笑み、

紅谷　このやろう、どすっ。
後藤　礼子はいい女なんだぞ、私には負けるけど。どすがすっ。
紅谷　でも、ルックスは勝ってるぞ、ぱんぱんっ
後藤　あんた、あたしに勝って何が嬉しいのよ。でも、テクニックはあたしが何百倍よ、どかぼこっ。
紅谷　私には愛があるもの、ぴしぴしっ。
後藤　若いわねえ、テクニックがあって初めて愛なのよ、ぼこぼこっ。
紅谷　だってあたしは誰よりも愛していたもの……（小さく）ぺんぺん。

動きが止まる紅谷。
後藤、紅谷を抱きしめる。
紅谷、後藤の胸の中で、小さく嗚咽し始める。

後藤　（抱いたまま）お前なんか、どっかいっちまえ、ばこばこっ。
紅谷　参三、あんたが男だったらよかったのに。
後藤　礼子、あんたが男だったらよかったのに。
紅谷　どうしてゲイなのよ。
後藤　どうして女なのよ。
紅谷　女は抱けないの？
後藤　考えただけで吐き気がするわ。
紅谷　ひどーい。
後藤　さ、酒じゃ、酒じゃ。
紅谷　酒じゃ、酒じゃ。

暗転。

16

声が聞こえる。

紅谷（声）　それから、また一週間が過ぎました。毎日、私は陛下と話しました。奇妙なことに、陛下は皇居に行きたいという願いを口にしなくなりました。しかし、彼の妄想は育ち続けているようでした。

笑い声。
明かりつく。
病室。
ベッドに立原、側に紅谷と後藤。

立原　それでな、皇太子がトイレに入ったんじゃ。そこに女官が走って

来てな、漏れそうじゃったんじゃ。ドンドンってノックして、

紅谷　「皇太子殿下、はやく、」

立原　じゃあ、今日はここまでにしましょう。また、明日。

後藤　周、カギです。

後藤　はい、陛下。

後藤、走って病室のドアに鍵をかけるアクション。

後藤　カチッ！

紅谷　何をするんです？

二人　ふわはははははっ。

紅谷　どうしたんです？

立原　先生、オチを聞いていただくまでは、帰しませんからね。

二人　ふわはっはっはっはは。

後藤　苦しみは分け合いましょう。二人で地獄に行くのよ。

二人　ふわはっはっはっ。

立原　（笑いを止めて）周、地獄とはどういう意味です？

後藤　あ、いえ、腹の皮がよじれる爆笑地獄です。さ、陛下、オチをどうぞ。

立原　（咳払いひとつ）「皇太子殿下、はやく、交代してんか？」

後藤　爆笑！爆笑！爆笑地獄！

立原　続いて、天皇小話三部作！

後藤　えっ？

立原　明治天皇がこんなことしてました。明治天皇、なにしてるんですか？「目、いじってんのう」。大正天皇がこんなことしてました。大正天皇、なにしてるんですか？「鯛しょってんのう」。昭和天皇が誰もいないショウパブに行きました。昭和天皇が言いました。「ショウ、終わってんのう」

後藤　陛下、お止めください。じつはものすごく危険です！

立原　楽しんでいただけましたか？

紅谷　はい、それはもう、充分に。

立原　そうですか。それはよかった。周、カギを開けなさい。

後藤　はい。カチャ。（紅谷に）どうぞ。……お疲れさまでした。
紅谷　お疲れさまでした。

紅谷、去る。

後藤　陛下、今日のもてなしは、ちょっと過剰接待でしたよ。
立原　そうか……周、なにかあったのですか？なんだか、嬉しそうですよ。
後藤　なにもありませんよ。
立原　しかし、
後藤　何もありません。だから、嬉しいんです。
立原　えっ？
後藤　ここしばらく陛下の体調もよろしいでしょう。こうやって、陛下のお世話をしながら、毎日が過ぎていく。そんな平凡な生活に幸せを感じているのです。
立原　天皇の世話をするのは平凡な生活ではないと思うが。
後藤　やだ、陛下。陛下こそ、ご気分がよろしいのはどうしてですか？
立原　私はやるべきことを見つけたのだ。
後藤　え、なんです？……あの、サンケイ新聞の人からは、そのうち、きっと連絡があると思いますから。
立原　そうではない。周、私は、后（きさき）をめとろうと思う。
後藤　えっ……
立原　賛成してくれるね。
後藤　えっ……そんな、賛成ったって私の心の準備もあるし、ウェディングドレスの好みも私、すごくうるさいし、
立原　なんの話です？
後藤　なんの話って、やだあ、
立原　私はあの人を必ず幸せにします。
後藤　あの人……？
立原　あの人はかわいそうな人です。自分のことを医者だと思い込んでいる。
後藤　えっ？

立原　だから私も患者を演じてきました。ですが、それも潮時です。私はあの人を救おうと決心しました。

後藤　あの人って……紅谷先生のことですか？

立原　祝福してくれるね。

後藤　祝福もなにも、紅谷先生の気持ちというものがあると思うのですが……

立原　もちろんです。

後藤　……。

立原　周、作家になりたいと言いましたね。

後藤　えっ？

立原　周はきっと素晴らしいものが書けるはずです。こんな所にいないで、はやく机に向かうのです。

後藤　それは昔のことです。

立原　周、自分に嘘をついてはいけません。

後藤　えっ？

立原　周、私に何かを求めても、それはないものねだりというものです。あなたはあなたの人生を歩くのです。

後藤　陛下、私は私の判断でお仕えしているのです。

立原　感謝しています。ですが、やがて、あなたは私を憎むようになるでしょう。

後藤　どういうことです？

立原　私は空なのです。

後藤　えっ？

立原　周、今までどうもありがとう。心から感謝します。私は周と出会えて幸せでした。

後藤　何をおっしゃってるんです！

立原　さあ、ブザーを押して先生を呼んで下さい。そして、二人だけにして下さい。

後藤　陛下、

立原　周、早くしなさい。

後藤　私は陛下の側を離れません。

立原　周！

後藤　陛下！
立原　……周、私のことが好きか。

間。

後藤　はい。
立原　周、私は人を愛した記憶がないのだ。
後藤　えっ？
立原　周、人を愛するとはどういうことだ？
後藤　陛下。
立原　愛していると確信できるとは、どういうことなのだ、周。
後藤　陛下。
立原　愛されているという感情は分かる。だが、愛しているという感情が分からぬのだ、周。
後藤　私が今、陛下に対して抱いている感情のことです。
立原　周、私はお前がうらやましい。心底、お前がうらやましい。
後藤　何をおっしゃってるんです！
立原　周、ブザーを押してくれ。そして二人にしてくれ。
後藤　陛下は先生がお好きなのですか？
立原　私は、愛するという感情が分からぬといったはずだぞ。
後藤　救うためにお后にするというのですか？
立原　私にできることはそれぐらいなのだ。
後藤　陛下はご自分がどんなに残酷なことをお話しになっているか、お気づきにならないのですか？
立原　周、私は愛するという確信はない。だが、救済という確信はあるのだ。
後藤　そんな言葉で愛を語るのは、愛に対して失礼です！
立原　そうかもしれぬ。しかし、私はこういうしかないのだ。
後藤　私はどうなのです。先生じゃなくて、私を救おうとはお思いにならないのですか？
立原　周。
後藤　私を后にするってのはどうです。私が后になったら、もう毎日フ

アッション変えて、ゴスロリからボンテージ、宮内庁がなんと言おうと、ヘビメタからティファニーまで全部やっちゃいますよ。喜びますよ、マスコミは！「周さま、ファッション特集」って、ＪＪからアエラまで全部載りますよ！楽しい国になるじゃないですか！

立原　周、私はお前を救いたいから別れを告げているのだ。

後藤　そんな勝手な理屈がありますか！

立原　周、私はお前の愛と呼ぶ感情に対して申し訳なくてしょうがないのだ。

後藤　陛下。

立原　周、もう何も言うな。本当に今までありがとう。感謝します。

後藤　私はここを離れません。

立原　なら、私が出て行く。

後藤　えっ、

立原　それが一番いい方法なのだ。

立原、ベッドから降り始める。

後藤　陛下！

無視して歩きだす立原。

後藤の手が立原の首に伸びる。

そのまま、立原の首を絞め始める。

立原　な、何を……、

後藤　……私も後から行きます。

暗転。

17

ブザーの音が響く。

明かりつく。
ベッドに立原。
後藤はいない。
紅谷が入ってくる。

紅谷　どうしました？……あれ、周さんは？
立原　ちょっと買い物を頼みました。
紅谷　買い物……。じゃあ、ブザーを押したのは？
立原　私です。
紅谷　陛下が。……どうしました？
立原　先生、私は本当に陛下なのですか？
紅谷　えっ？
立原　私は本当に天皇なのですか？
紅谷　……どういうことです？
立原　私が聞いているのです。私は本当に天皇なのですか？
紅谷　それは、あなたが決めることですよ。
立原　私がどうしてこんな質問をしているのか、あなたが本当の医者なら、分かるはずですよ。
紅谷　えっ？
立原　私は、本当に天皇なのですか？
紅谷　……天皇ではないと思います。
立原　では、私はなんです。
紅谷　自分を天皇だと思っている一人の男です。
立原　それでは私は狂っていることになってしまう！
紅谷　そうではありません。病気であるだけです。
立原　ずっとそばにいてくれませんか。
紅谷　ええ、分かってますよ。
立原　そういう意味じゃないんです。本当にそばにいて欲しいんです。
紅谷　えっ？
立原　私と一緒になって下さい。
紅谷　何をおっしゃるんです。
立原　子供は二人で育てましょう。

紅谷　！
立原　おろさなくてもいいです。
紅谷　どういうことです？
立原　その通りのことです。おろしてはいけません。
紅谷　なにか誤解なさってますね。
立原　この場所は、散歩するには刺激的すぎますね。
紅谷　噂を簡単に信じてはいけませんよ。
立原　おや、そういう噂があるのですか？
紅谷　えっ？
立原　安心して下さい。子供は二人で育てましょう。
紅谷　何を言ってるんです。
立原　かわいそうに。
紅谷　えっ？
立原　誰がそんな噂を流したか考えていますね。
紅谷　違いますよ。
立原　想像力だけが、人を傷つけるのです。
紅谷　いったい、どうしたんです？
立原　かわいそうに。医者でなければ、あなたはここで叫ぶこともできるのに。
紅谷　何を言ってるんです。
立原　一人の人間を救うためには、何が必要かお分かりですか？
紅谷　……いいえ。
立原　もう一人の人生です。
紅谷　そんなことを言ったら、医者という職業は成り立ちませんよ。
立原　私は陛下をやめます。
紅谷　えっ？
立原　だから、あなたも医者をやめませんか。
紅谷　何を言ってるんです。
立原　医者をやめて、叫びたい時に叫ぶ人生を生きませんか。
紅谷　いい加減にして下さい。怒りますよ。
立原　それでいいんだよ、礼子。
紅谷　えっ、

立原　怒りたい時に怒る。それでいいんだ、礼子。
紅谷　何を言ってるんです。
立原　もう一度最初からやり直そう。紅谷先生なんてこの世にはいなかったんだ。ただ、君の妄想が作り上げただけなんだ。
紅谷　今日はここまでにしましょう。続きは明日ですね。
立原　君は君の主治医の真似をしているだけなんだ。
紅谷　何を言ってるんです。
立原　ここは病院だよ。新興宗教のホームじゃない。君はずっと意識を失っていたんだよ。
紅谷　えっ。
立原　あいつらは君が壊れるまで君を追い詰めた。君は何年も君じゃなかった。でも、それは君の責任じゃないんだ。
紅谷　何を……、
立原　礼子、参三が言ったことを覚えているかい。約束したじゃないか。あの最後の屋上で、僕達三人、もし、ここから飛び下りたくなるようなことがあったら、その時は、何をしていても駆けつけようって。
紅谷　えっ……、
立原　どんな大人になっていても、それだけは約束しようって。
紅谷　……あなた、雅人なの？
立原　もういいんだよ、礼子。君は医者じゃないんだ。だから、自分の感情を我慢する必要はないんだ。
紅谷　雅人、雅人なの？どういうこと？あなた、自分が何を言ってるのか分かってるの？
立原　礼子、僕は真実を語っているんだ。君は君の妄想を生きてるだけなんだ。
紅谷　じゃあ、参三はどうなの？あなたの説明だと参三はどうなるの？
立原　参三も精神を病んでる。
紅谷　えっ。
立原　愛する人にひどいことをされたんだ。それ以来、参三は自分の愛の行き場を求めて病んでいるんだ。
紅谷　冗談じゃない。参三もあたしも患者だと言うの？

立原　そして、僕は医者だ。

間

紅谷　何を……冗談じゃないわ。私と参三が偶然、同じ病院にいたと言うの？

立原　いいや。参三は私が転院させた。閉鎖病棟の奥深くで苦しんでいたからね。

紅谷　何を言ってるの！私は毎日、家に帰って生活していたのよ。

立原　君は毎日、よく寝ていたよ。

紅谷　！

立原　さあ、礼子。もう一息だ。もう一息で君は君の幻想を打ち破ることができる。君はもう一度、やり直すんだ。

紅谷　何を言ってるの。

立原　さあ。

立原、紅谷に一歩近づく。

紅谷　やめて！私は医者なの。誰がなんと言おうと医者なの。

立原　礼子、君のお腹の子の父親は僕だ。

紅谷　！？

立原　君は妄想の中で、僕を二つに分けた。友人としての僕と医者としての僕だ。

紅谷　何を言い出すの？！

立原　君はずっと悪魔と戦っていた。何年も何年も、君の心の中で君が妄想した悪魔とだ。君は半狂乱になり、僕は君を抱きしめた。その時、君は本当に苦しそうに僕にこう言った。「先生、本当は悪魔なんていないんですよね」「ああ、そんなものはこの世にはいないんだ」僕は答えた。「先生が私の神様なら、悪魔を追い出してくれるのに」君は本当にかすかに呟いた。僕は、僕は、医者として、してはいけないことをした。

紅谷　もういいわ、雅人。

立原　責任は取るつもりだ。

紅谷　えっ？

立原　僕は、君をもうひとつ深い妄想に追い込んでしまった。僕は自分の人生を終わらせることで、君に謝る。

紅谷　何を言ってるの？

立原　だから、礼子、妄想に勝つんだ。君は、本当の君に戻るんだ。

立原、錠剤のつまったビンを出す。

立原　礼子、これが僕の最後の願いだ。

立原、錠剤を飲み込もうとする。

その直前、後藤、出てくる。

後藤　やめて！あなたは私の腕の中で死んだの！私がこの手で首を絞めたの！

紅谷　違うの、参三！それはあなたの妄想なの。首を絞める途中で、あなたは病室を飛び出したの！

立原　そうだ、参三。おまえは私を殺してなんかいない。私はこうして生きているんだ！

後藤　いいえ。あなたはもう死んでいるの。私は生きているのに死んでいる人間だから、死んでいるのに生きているあなたが見えるの。

紅谷　違うの、参三！真実はこうなの。あなたに首を絞められた陛下は雅人に戻り、私を追い詰めた。でも、彼は錠剤を飲み込むことができなかったの。そして、私の胸で泣き出し、こう言ったの。

１８

立原　（紅谷の妄想の立場で）礼子、本当は僕が誰なのか分からないんだ。

後藤、二人のやりとりを見始める。

紅谷　えっ？

立原　天皇じゃない予感なんてずっとあったんだ。でも、天皇じゃないんなら、僕は何なのかわからないんだ。立原雅人という名前は分かった。でもそれは、僕にとって、空虚な記号でしかないんだ。立原雅人と口の中で繰り返しても、僕には何の感情も沸かないんだ。

紅谷　大丈夫よ、大丈夫。時間をかけて、ゆっくりと自分を取り戻していきましょう。

立原　違うんだ、礼子。僕は知ってしまったんだ。本当の僕なんかないんだってことを。

紅谷　えっ？

立原　僕は僕の中にいくら旅を続けても、本当の僕なんか存在しないんだ。ただ立原雅人と書いた箱の中には、風が吹いているだけなんだ。

紅谷　雅人。

立原　でもそれが当然のように思えるんだ。当然だと思えるのに、不安で不安でたまらないんだ。自分が何者か分からない不安じゃない。僕は、自分が何者でもないと知った途端、不安で不安でたまらないんだ。僕は不安そのものもなんだ。

紅谷　雅人……。

立原　僕はどうしたらいいんだ？

紅谷　大丈夫、私がいるから。

立原　……えっ？

紅谷　私がここにいるから。

立原　……

紅谷　だから、大丈夫。

立原　ありがとう、礼子。でもね、これは治療とは関係のない問題なんだ。治療を受け、僕が正常になったとしても、僕はただ、今と同じ何でもない僕に戻るだけなんだ。そして、不安も、

紅谷　そしたら、何かになりましょう。

立原　えっ？

紅谷　あなたが何でもないのなら、そんなあなたを放り投げて、あなたは何かになればいいの。

立原　えっ……。

紅谷　大丈夫。きっと何かになれるわ。

立原　礼子……。

紅谷　大丈夫。私がそばにいるんだから。

立原　……。

紅谷　そばにいて、まず、何者でもないあなたに、私達の再会から話してあげる。

紅谷に光が当たる。

紅谷　彼が病院の噂を使って、私を追い詰めようとした気持ちは、私には痛いほど分かりました。雅人が言いたかったことはただひとつ、誰かを愛したいということだったと私には思えました。自分を愛そうとして、自分を見つめ続けた果てに、たどり着いた誰もいない広場で、雅人は悲鳴を上げ続けている。この確信は、雅人のそばにいることで、ますます深まっていきました。ベッドのそばに立ち、雅人の寝顔を見つめれば、漏れてくる寝息のかすかな響きのひとつひとつが、私には、雅人の悲鳴のように聞こえました。ですが、私には、その響きが、私が私を越えて行く時の行進曲のようにも、新しい私を告げるファンファーレのようにも聞こえたのです。その響きは、雅人のそばにいることで、少しずつ、大きくなっていきました。

暗闇の中から、声がする。

19

立原　違うんだ、礼子。

立原にも、光が当たる。

立原　違うんだ。……それは君の妄想なんだ。
紅谷　えっ？
立原　あの時、薬を握りしめていたのは、君なんだ。
紅谷　えっ！？

立原、紅谷に飛びつく。

立原　やめろ！（紅谷を抱きしめて）やめるんだ！
紅谷　（立原の妄想の立場で）放して！私を死なせて。お願いだから死なせて！
立原　落ち着くんだ。冷静になるんだ、礼子！
紅谷　落ち着いてなんかいられないのよ！落ち着いたら、またあの声が聞こえて来るのよ！もう、私を許して！私を許してよ！
立原　君は誰からも責められてなんかいない！君は君なんだ。君が君を許すんだ！
紅谷　嘘よ！悪魔は絶対に私を許さないの！どこまででも私を追いかけてくるのよ！私は死ぬしかないのよ！
立原　見るんだ、礼子！目を背けるんじゃない！悪魔の顔をしっかりと見るんだ！逃げないで、悪魔の顔を見るんだ！
紅谷　いやよ、いやよ！
立原　見るんだ！悪魔は誰の顔をしている？誰の顔なんだ！
紅谷　いやよ！悪魔の目を見たら、私は悪魔に殺されてしまうの！
立原　見るんだ！

立原、紅谷の顔をぐいと正面に向ける。

紅谷　……お母さん！お母さん！許して、私を許して！私は何もしてないの！お母さんに言われるようなことは何もしてないの！
立原　そうだ。悪魔じゃない。お母さんだ！君は何も叱られるようなことはしていない。大丈夫だ、お母さんは君をもう叱ったりしないよ。

紅谷　いいえ！お母さんが許すはずがないわ！私はいけない事をしたの！私は死ぬしかないの！

立原　僕が守ってやる！お母さんが叱りに来ても、僕が礼子のお母さんから守ってやる！

紅谷　お母さんは悪魔なのよ。夜でも朝でもお母さんは来るのよ！

立原　大丈夫だ。十字架とニンニクとお経と御札全部集めて、礼子を守ってやる！

紅谷　えっ……。

立原　僕がずっと君を守ってやる！

紅谷　……雅人。

立原　僕がずっとそばにいて、君を守る！

紅谷　お母さんは私の中にもいるのよ。

立原　お母さんが出て来れないように、僕はずっとそばにいる。

紅谷　……朝も昼も夜もずっと？

立原　朝も昼も夜もずっとだ。ずっと、ずっとだ。

紅谷　ずっと？

立原　ずっと。

立原、紅谷を抱きしめる。

20

声がする。

後藤　（後藤の妄想の立場で）はい、薬の時間ですよ。紅谷さん、大丈夫ですか？さあ、二人とも、薬を飲んで寝ましょう。

後藤、立原と紅谷を後ろへ促す。

後藤に光が当たる。

後藤　以上が、現在の患者の状態です。二人は、お互いに医者と患者を演じあうことによって妄想を膨らせませています。その役割は固

定的ではなく、ある時は患者、ある時は医者と使い分けているようです。しかし、私は妄想で作り上げた二人の関係の中に、ある種の真実があるように思えてしかたないのです。二人の揺れ動く関係の中から、あるしっかりとした真実を見つけ出すために、私は二人を見続けようと思っています。

暗闇から声がする。

21

立原　違うんだ、参三。それは、お前の妄想なんだ。
後藤　えっ？
立原　たしかにお前は私の首を絞めた。
後藤　えっ？
立原　だけど、お前は私を殺せなかったんだ。お前は、

後藤、立原に飛び掛かり、立原の首を絞める。

立原　参三……
後藤　（立原の妄想の立場で）……私も一緒に行きます。

立原、もがく。

立原　参三、そうして、また繰り返すのか！

後藤、はっとして、手を放す。

後藤　えっ！？
立原　参三、思い出すんだ！お前は誰を愛していたんだ？お前の愛はどうなったんだ！
後藤　私の愛……私の愛？
立原　お前は誰を愛していたんだ！

後藤　……あなたも、あなたもなのね。
立原　えっ？
後藤　私の愛した人はみんな私から去っていく。どうして、どうしてなの！どうして嘘をつくの！どうして私を裏切るの！どうしてもう愛してないなんて言えるの！
立原　参三、認めるしかないんだ。お前の愛した人はもういないんだ！
後藤　どうしてそんな事が言えるの！どうしてそんな顔ができるの！どうして他の人を愛せるの！どうして他の人が抱けるの！どうして、愛してくれないの！？
立原　参三、しょうがないんだ！
後藤　どうしたらいいの、私はどうしたらいいの！あの人のいない生活なんて、あの人のいないテーブルなんて、あの人のいないベッドなんて、あの人のいない毎日なんて、私はどうしたらいいの！
立原　参三、落ち着くんだ！
後藤　どうして、どうしてなの！愛すれば愛するほど、どうしていなくなるの！
立原　落ち着くんだ！
後藤　他の人の所に行くぐらいなら、私はあなたと一緒に、
立原　参三！

立原、後藤の頬をぴしゃりと叩き、そして、ぎゅっと抱きしめる。

後藤　えっ……。
立原　……参三、お前の愛した人はもういないんだ。
後藤　雅人……。
立原　……だけど、僕はここにいる。

後藤、崩れ落ち、そのまま嗚咽を始める。
後藤に光が当たる。
暗闇の中から声がする。

紅谷　いいえ、それはあなたの妄想です。

立原、去る。

紅谷、前に出る。

紅谷　参三、しょうがないじゃないの。

（紅谷の妄想の立場で）ほっといてよ。

後藤　ほら、涙を拭いて。付き添えなくても面会にくればいいじゃない。

紅谷　いいのよ。悔しいけど、雅人はあんたにあげるわ。

後藤　えっ、何言ってるの？

紅谷　あんた達なら、きっとうまくいくわよ。あたしのカンは当たるんだから。

後藤　ちょっと待ってよ。

紅谷　いいじゃない。初めての男に戻るってことよ。

後藤　えっ？

紅谷　ごめん、下品だったわね。元の鞘に納まるってやつよ。あら、もっと下品みたいね。

後藤　何言ってるの？

紅谷　いいじゃない。あげるって言ってるんだから。少々の下品は許してよ。

後藤　どういうことよ。

紅谷　あ～あ、なんだか高校時代と同じになっちゃったわね。

後藤　なんか勘違いしてない？私と雅人って、何もなかったのよ。

紅谷　えっ？

後藤　あんたが想像しているような関係はなかったのよ。

紅谷　……嘘う！

後藤　嘘なんか言わないわよ。私、そういうこと、だめだったのよ。

紅谷　ま、今でもあんまり得意じゃないけど。

後藤　えー！なによ、それ。なによ、なによ！じゃあ、あたしは一体、

なんだったのよ！

紅谷　こっちが聞きたいわよ。……参三、これからどうするの？

間。

後藤　あたしさ、雅人のこと、好きよ。

紅谷　分かってる。

後藤　でも、礼子のことも好きなの。

紅谷　え？

後藤　よしてよ。変な意味じゃないわよ。……私、ここにいてもいいかな。

紅谷　だって、もう雅人のそばにはいられないでしょう。

後藤　病院のどこか。私、食堂のおばちゃんになる。料理、自信あるのよ。変装するから。割烹着、着て、頬かむりして。ね、絶対にバレないから。

紅谷　絶対にバレるよ。

後藤　礼子、お願い。

紅谷　でもねえ……

後藤　私、雅人と礼子の愛の行方を見たいの。

紅谷　何言ってるの。それは参三の妄想よ。

後藤　妄想でいいのよ。愛なんて、そもそも妄想みたいなものでしょう。

紅谷　言うわね。

後藤　妄想なのに、こんなに苦しいのよね。妄想なのに、真実なのよ。

紅谷　えっ？

後藤　礼子、最後の屋上のこと、覚えてる？

紅谷　忘れるわけないよ。

後藤　あたしはこう言ったのよね。「今日限り、三人で会うのはやめないか」

紅谷　私達は、「えっ」と声を上げた。

後藤　雅人がこう言った。

立原が入って来る。

立原　参三、どうしてだ。理由を言え。

後藤　理由なんかないんだ。ただ、もう会わない方がいいと思うんだ。

紅谷　何言ってるの。そりゃ、大学は別々だけど、お正月だってお盆だって会えるじゃないの。

後藤　無理しなくていいんだ。

立原　無理？どういう意味だよ？

後藤　いいんだ。

紅谷　よくないよ。どういうことなの？

後藤　僕は幸せだった。雅人と礼子に会えて本当によかったと思ってる。でも、このまま、三人の関係を続けたら、僕達はだめになるんじゃないかと思うんだ。

紅谷　どういうことよ？

後藤　でも、これだけは約束する。もし、誰かが、ここから飛び下りたくなるようなことがあったら、その時だけは、何をしていても駆けつける。

二人　えっ？

後藤　どんな大人になっていても、それだけは約束する。

紅谷　参三、どうしたの？

立原　いいよ。僕も約束する。

後藤　礼子は？

紅谷　そりゃ、約束するけど。ね、今年の夏は、三人で海に行こうね。

後藤　ありがとう。僕は作家になって、必ず、僕たち三人のことを書く。

紅谷　私のことは、ちゃんと美しく書いてよ。

後藤　ああ。

間。

後藤　僕は正直に書く。心ない噂に負けて逃げ出したのは僕なんだと。

紅谷　えっ？

後藤　君達二人が、僕を迷惑だと言っているという噂を簡単に信じた僕の愚かさを書く。

紅谷　参三。

後藤　君達二人が、かなりの関係だと冷やかした噂を受け入れた僕の弱さから僕は書き始める。

紅谷　参三。

後藤　僕はようやく、書くことを見つけたんだ。僕は、もう逃げ出さない。僕は書き続ける。

立原　はい、そこまで。今日はこれぐらいにしておきましょう。さあ、二人とも、薬の時間ですよ。

間。

お互いを見つめる三人。

お互いの顔に、微笑みが浮かぶ。

それは、この現実を受け入れ、そして、生きていこうという微笑みに見える。

三人の口がゆっくりと開く。

私の愛する人は
精神を病んでいます。
ですが　私は
とても
幸福です。
あなたが私を必要とする限り
私は変わり続けられるのです。
私があなたを愛する限り
あなたは私の大切な人なのです。
あなたが何に傷つき
あなたでなくなったのか
あなたの哀しみの深さを
私は知りません。
ですが　あなたが私を必要としていることだけは

私は分かります。
あなたがどんな妄想に生きようと
私を必要としていることだけは
分かるのです。
そしてそれは
どんな妄想より大切な
真実なのです。
そして
あなたのそばに私がいること
私のそばにあなたがいること
すべてはそこから始まるのです。
私の愛する人は
精神を病んでいます。
ですが　私は
とても
幸福です。

完